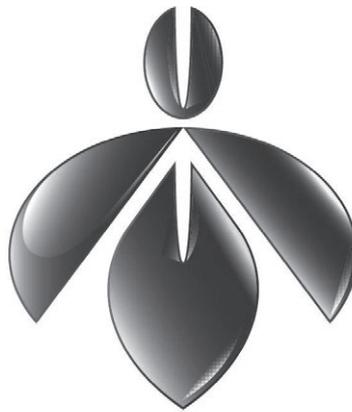


魅力あふれる大学づくり関連事業

令和7年度

学生自主企画研究
事業報告書



愛知県立大学
教育支援センター

目 次

| | |
|------------------------------------|----|
| 事業報告 | 1 |
| 〈学生自主企画研究成果レポート〉 | |
| 1 持ち歩きたい観光マップを考える -篠島から魅力発見!- | |
| 小関 明里グループ | |
| | 5 |
| 2 普門寺の前近代文献資料による東海地域社会史の将来展望的構築 | |
| 長尾 愛梨グループ | |
| | 17 |
| 3 「困難若年女性」にとっての安全な居場所の要件 | |
| 加藤 舞乙グループ | |
| | 27 |
| 4 大学生の抱える睡眠課題の改善に向けたガイドラインの作成 | |
| 中山 怜士グループ | |
| | 47 |
| 5 持続可能な観光の展望 -犬山市におけるフィールドワークを通して- | |
| 山門 悠楽グループ | |
| | 61 |
| 参考資料 | 79 |

ごあいさつ

教育支援センター長 菊池 好行

学生自主企画研究・活動は、学生の皆さんが自ら見出した問題意識に基づいて企画・実施する研究や活動に、大学が研究費を補助するもので、愛知県立大学では15年を超える伝統があります。各学科・専攻のゼミ、ラボで取り組む卒業研究の場合、特定の専門領域の中で関心のある問題を探して、原則個人で研究を行いますが、学生自主企画研究・活動はグループで実施し、そのグループに様々な学部の学生が加わることが可能となっている点が重要な特色です。地域・社会にインパクトを与える取り組みであることが明示的に求められる点も大きな特徴となっています。こういった諸点は、昨今の大学教育で重要視されている、社会課題の発見・解決提案力やチームワーク力の涵養、専門領域間の連携、社会の様々なステークホルダーとの対話の促進と深く関わっています。学生自主企画研究・活動が長く続いていることは、愛知県立大学の教育の先駆性を示している例の一つといえるのではないのでしょうか。

今年度も昨年度と同様に、地域連携テーマ、多文化共生テーマ、自由テーマの3区分で募集を行ったところ、計5件の応募が学部生・大学院生からあり、書類・公開ヒアリングの結果、5件すべてを採択しました。内訳は地域連携テーマが3件、自由テーマが2件でした。地域連携テーマが観光・文化財活用に関する社会課題への取り組み、自由テーマは人々のウェルビーイングに関わる課題への取り組みであったことは、上で述べた学生自主企画研究・活動の趣旨を深く理解している証と感じました。

研究の進捗状況を報告する中間発表会を10月下旬に、最終発表会を1月に行いました。フィールドワークの進捗状況に応じて、研究計画を修正したグループもありましたが、学生の皆さんはそういった困難を創造的に乗り越え、素晴らしい成果を出してくれました。

本事業の実施にご支援、ご協力をいただいた皆様に感謝申し上げます。古川真也愛知県公立大学法人理事長、川畑博昭学長、服部淳子副学長・糸魚川美樹副学長、各センター長・学部長を始めとする教員の皆様には、選考から中間発表、最終審査に至るまで、研究内容に対する厳正な評価と貴重なご助言をいただきました。社会福祉学科松宮朝教授には、スキルアップ講座を実施していただきました。柴田陽一副センター長には発表会での司会進行をお引き受けいただきました。地域連携センターのご協力により最終報告会を録画し、その動画を愛知県教育委員会にご提供いただきました。また、同録画動画は学術研究情報センターが主催する愛県大アカデミックデイ(Day2)にてオンデマンド配信していただきました。様々な形で研究を支えてくださったグループの推薦(指導)教員の皆様、また、地域の皆様をはじめ研究に協力してくださったすべての方々にも御礼申し上げます。

最後に、この事業は参加して下さる学生の皆様あってのものです。今年も積極的に応募し、意義深い研究を実施して下さった学生の皆様に満腔を送るとともに、今後も学生の皆さんの学生自主企画研究・活動への積極的な参加を期待いたします。

2025年度事業報告（概要）

1. 事業計画

(1) 内容

学生の自主性、創造性を刺激することにより、勉学意欲の向上を図るため、学生自主企画による研究・活動プロジェクトを公募し、採択されたものに対して、研究資金を助成する。その研究・活動成果の発表会を開催し、グループの調査成果を学内で共有する。

(2) 申請者

愛知県立大学生、同大学院生で構成された研究グループは、代表者を含む正規構成員(3名～10名)と協力者(0名～人数制限なし)とする。同一人が、正規構成員として複数グループに属することはできない。本学専任教員1名の推薦が必要。推薦教員はその研究グループのアドバイザーに就任する。

(3) 研究テーマ

● 地域連携テーマ

愛知県内又は愛知県近傍の地域の歴史や風土に関する研究・調査や地域活性化や交通機関の利用促進など、地域の課題解決に繋がる研究・調査テーマ

● 多文化共生テーマ

在住外国人の医療、福祉、教育、雇用、言語、文化の諸問題など愛知県内又は愛知県近傍の地域のグローバル化に伴う地域社会の多言語・多文化化の進展に伴う課題などの研究・調査テーマ

● その他、自由テーマ

上記テーマによらず、自分たちの関心に応じた自由な研究・調査テーマ

(4) 助成金額

最大 250 千円/件（研究内容等により調整あり）

(5) 助成件数

採択グループ 5 件

(6) 採択方法

第一次審査 提出書類による審査。

第二次審査 第一次審査合格グループに対して公開ヒアリングを行い、教育支援センター運営会議で決定。

(7) 研究期間

2025年6月2日（月）から2026年1月20日（火）まで

(8) 研究成果公開

研究終了後、研究発表会を開催する。

2. スケジュール

| | |
|---------------|--|
| 4月14日 | 学生自主企画募集開始 UNIPAにて応募用紙などの書類を掲示 募集期間：4月14日(月)～5月9日(金) 募集期間延長：5月14日(水)まで |
| 5月14日 | 募集締め切り |
| 5月14日 ～15日 | 第一次審査 応募：5件（地域連携テーマ3件、多文化共生テーマ0件、自由テーマ2件） 教育支援センターにおいて第1次審査を実施。応募のあった5件を第二次審査の対象とすることを決定。（5月15日に審査結果を発表） |
| 5月21日 | 第二次審査（公開ヒアリング） 13:00～14:30 S101教室にて公開ヒアリングを実施。参加：5チーム 第二次審査における役職者の審査結果をもとに、教育支援センターにて最終選考を実施。審査の結果、研究テーマ5件すべてを採択。 |
| 5月24日 | 2025年度 研究助成金採択グループを公表。 グループ代表学生に取扱説明資料を配付 |
| 6月11日 | 学生自主企画研究関連講座・研究スキルアップ講座 13:30～14:30 H203教室にて「社会調査の実践的スキル」（松宮 朝教授（社会福祉学科））講座を開催。同時に研究助成金説明会を開催。 |
| 10月22日 | 中間報告会 13:00～14:30 S101教室にて、中間発表会を開催。 |
| 1月21日 | 最終研究発表会、審査終了後に表彰式 13:00～14:30 S101教室にて、研究発表会を開催（ハイブリッド形式）。 動画録画は、地域連携センターを通じて愛知県教育委員会に提供すると共に、学術研究情報センター主催の愛県大アカデミックデイ(Day2)にオンデマンド配信。 |
| 1月30日 | 研究成果レポート、実施報告書及び出納簿を提出。 |

3. 経過の詳細

- 本事業も19年目となり、本学の特色ある取り組みの一つとして学内で位置づいている。
今年度は採択件数の上限を6チームとし、1チーム当たりの助成金額を25万円とした。
- （うち地域連携テーマ分として、地域連携センターより1チーム分の金額の助成を受けている。）
- 過去5年間の応募件数、採択件数の推移は以下の通りである。

| 年度 | 応募件数 | 第一次審査合格件数 | 採択件数 |
|--------|------|-----------|------|
| 2021年度 | 11件 | 11件 | 8件 |

| | | | |
|--------|----|----|----|
| 2022年度 | 6件 | 6件 | 6件 |
| 2023年度 | 9件 | 9件 | 6件 |
| 2024年度 | 7件 | 5件 | 5件 |
| 2025年度 | 5件 | 5件 | 5件 |

- 第一次審査は書類選考とし、応募した5件中5件全てを合格とした。審査は教育支援センター運営会議構成員により、①応募資格の基準を満たしているか、②3テーマ（地域連携、多文化共生、自由）に即した取り組みであるか、③研究・活動の実行可能性について協議のうえ決定した。
- 第二次審査は公開ヒアリングとし、審査は募集要項に明記の3基準を基に①「地域貢献」：地域や社会に貢献する取り組みであるか、②「問題意識」：「自主的な問題意識」を持って何を明らかにしそこから何を学び取ろうとしているか、③「アプローチ」：適切な研究・活動アプローチをとっているか、④「実効性」：予算の使い方と研究計画との関連、⑤「プレゼン」：プレゼンテーションは優れているか、の5基準を各4点で採点、合計20点満点で審査員（学長、副学長、学部長、センター長、計14名）が採点した。採点結果に基づき5件の採択を決定した。
- 学生自主企画研究関連講座・研究スキルアップ講座として、採択されたグループの構成員を対象に、松宮先生(社会福祉学科教授)の「社会調査の実践的スキル」を開催した。
- 中間報告会は愛知県立千種高校生徒による探究活動報告・ポスター発表会と合同で開催した。
- 最終研究発表会は、基本は対面形式での開催としてグループ構成員は都合のつく限り会場で参加した。ハイブリッド形式で実施し、録画動画は地域連携センター経由で愛知県教育委員会に提供するとともに、学術研究情報センターが主催する愛県大アカデミックデイ(Day2)にオンデマンド配信した。いずれのグループもしっかり準備されたプレゼンテーションで、質疑も活発に行われた。
- 採点は①「研究内容」10点満点、②「プレゼンテーション」5点満点とした。採点者は役職者の教職員とした。得票数(平均得点)により金賞と銀賞を選出、川畑学長から賞状および副賞の図書カード(金賞2万円・銀賞1万円)が授与された。

| 賞 | 代表者 | 研究テーマ |
|----|-----------------------------|-------------------------------|
| 金賞 | 小関 明里 (日本文化学部 歴史文化学科) | 持ち歩きたい観光マップを考えるー篠島から魅力発見！ー |
| 銀賞 | 長尾 愛梨 (日本文化学部 歴史文化学科) | 普門寺の前近代文献資料による東海地域社会史の将来展望的構築 |

学生自主企画研究成果レポート



学生自主企画研究・活動 成果レポート

| | |
|-------------|--|
| 研究課題 | 持ち歩きたい観光マップを考える —篠島から魅力発見！— |
| 研究代表者 | 日本文化学部 歴史文化学科 氏名 小関明里 |
| グループ 構成員 | <p>《正規構成員》</p> <p>日本文化学部歴史文化学科 3年 小関明里 日本文化学部歴史文化学科 3年 竹内心哉 日本文化学部歴史文化学科 3年 戸松唯 日本文化学部歴史文化学科 3年 和田来未</p> <p>《研究協力者》</p> <p>科目等履修生 粉川斐成 国際文化研究科日本文化専攻 若林あかり 国際文化研究科日本文化専攻 末永芽久</p> |

目次

1. はじめに
 - 1.1 研究背景及び研究目的
 - 1.2 研究概要
2. 活動内容
 - 2.1 観光マップのテーマ選定
 - 2.2 ^{しのじま}篠島における実地調査
 - 2.2 観光マップ試作品の作成
 - 2.3 篠島における試作品の検証
3. 研究活動の最終的な成果物について
 - 3.1 試作品の修正
 - 3.2 完成版観光マップの刊行および配布

- 4. おわりに
 - 4.1 まとめ
 - 4.2 謝辞

1. はじめに

1.1 研究背景及び研究目的

既存の観光マップでは、観光地の情報が偏りなく記載されており、非常に使いやすい一方で、2つの課題を抱えていると考える。第1に、観光スポットの情報がまんべんなく記載されているため、かえって注目すべき場所が分かりにくい点である。第2に、紙の観光マップは手に取られにくいという点である。これらの背景には、観光マップに対して地図の正確性や情報の網羅性・公平性¹が求められてきたこと、SNSを通じて観光地の情報を収集する若者が多いことが考えられる。そこで本研究の目的は、従来の観光マップが抱える課題を整理したうえで、観光客が「持ち歩きたい」と感じる観光マップの形式を検討し、地域の魅力を伝えられるマップを考えることとした。

1.2 研究概要

本研究では、1枚の地図では伝えきれない地域の魅力を、新たな観光マップを通じて再発見することを目指す。具体的には、最低限の地図情報を印刷したクリアファイルに、テーマごとのマップを差し込む形式を採用した。これにより、観光客が自身の関心に応じて見たいテーマのマップを選択でき、また知らないテーマを知るきっかけになると考えられる。

対象地域は、愛知県知多郡南知多町に属する篠島である。篠島は海岸線の長さが8kmということから、1日で歩いて観光できるという利点がある。また、予備調査で篠島を歩いた際、歴史的なスポットや絶景スポットなどの多くの魅力があると感じた。そのため、あえてテーマ別に情報を記載した新たな観光マップを作成し、学生目線で見たい篠島の魅力を発信することを目標とする。

2. 活動内容

2.1 観光マップのテーマ選定

篠島の観光マップ作成において、いくつかテーマを選定した。当初は、絶景スポット、歴史、散歩道、防災の4テーマが最終候補に挙がった。その後、8月の第1回実地調査を経てマップのテーマを確定した。最終的に、①昭和レトロなスポットを集めた「レトロ」、②篠島ならではの景色をとり上げた「絶景スポッ

¹ 手書き地図推進委員会編 2019『地元を再発見する！手書き地図の作り方』学芸出版社

ト)、③篠島の歴史をとり上げた「歴史」、④神社や恋人の聖地のご利益をまとめた「パワースポット」、⑤好みに合わせて島歩きを楽しめる道^{こみち}をまとめた「小径」、⑥観光客のためのハザードマップである「防災」という6つのテーマを選んだ。

候補に挙がっていた以外のテーマ選定理由は後述の通りである。まず、島を歩く中で、懐古的な気分になるような、所謂「昭和レトロ」な宿泊施設や喫茶店などが多く発見されたため、「レトロ」のテーマを決定した。また、篠島には多くの神社があり、そのご利益について関心を持った。加えて、恋人の聖地が2箇所あり、恋愛のご利益が観光客から注目されていると考えた。そこで、「パワースポット」のマップとして、ご利益がある場所を一挙に紹介することにした。「散歩道」は、当初巡るルートを決めようと考えていたが、自由に散策を楽しんで欲しいため、篠島ならではの道だけに注目した。それに合わせて、「小径」という名称に変更した。また、篠島の星が綺麗なことを伝えたく、夜の時間帯も取り上げたいと考えていた。しかし、場所によっては街灯がない暗い道や険しい道もあるため、朝～夕方時間帯を主に取り上げた。

以上の内容で、9月から11月にかけて試作品の作成に取り組んだ。

2.2 篠島における実地調査

篠島におけるフィールドワークは、2025年8月17～18日、11月10日、11月24日、12月18日の計4回、5日間行った。そのうち、試作品完成前には計2回調査を行った。8月17日から8月18日にかけて行った実地調査では、2日間にわたり篠島内を歩き、地図に記載する場所や道の確認を行い、アクセスに関する情報やスポットの目印などの情報を集めた(図1、2)。島民や観光客にも聞き取り調査を行い、スポットに関する情報を集めた。また、マップに載せる写真も適宜撮影した。2025年11月10日に行った第2回実地調査では、マップを作成するうえで必要となった追加の情報収集や写真撮影、取りあげた観光スポットまでの細かなルートを確認した。残り2回のフィールドワークについては、2.4、3.2において詳しく述べる。

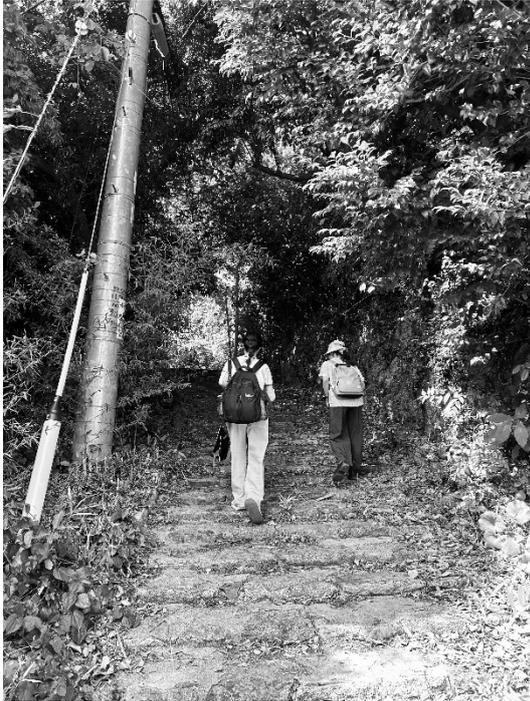


図1 避難経路確認の様子
(2025年8月17日撮影)



図2 夜の篠島港の様子
(2025年8月17日撮影)

2.3 観光マップ試作品の作成

マップの作成において、テーマごとの雰囲気を出すため、テーマに即した配色やフォントを選定し、マップを作成した。ベースとしたマップに関しては、⑥ハザードマップを除き、共通のものを使用している。これは、紙のマップ単体で完成するものではなく、クリアファイルに差し込んで初めて地図が完成するという目的のためである。

また、マップに載せる情報について、ハザードマップ以外の5つのマップには、アクセスとスポットの基礎情報を共通して載せ、加えて学生目線のおすすめポイントや裏話などを表面、または裏面に記載した。裏面については、表面で語りきれなかった情報の補填などを行った。テーマごとに記載した情報の詳細については下記のとおりである。

①レトロ (図3、4)

表面：篠島を歩く中で、作成者が訪れ、発見した「昭和レトロ」なスポットを紹介している。中が白塗りになっている篠島の白地図に、星で位置を示した。観光スポットそのものの名称を示すのではなく、雑誌の見出しを意識してアオリ文を付けた。また、島民から聞いたスポットに関する情報や作者目線のおすすめポ

イントを記載した。具体的には、篠島郵便局で丸ポストがいつからあるのかを伺い、いつからいつまで使われていたか不明であること、もともと旧篠島小学校の近くにあったかも明らかではないという情報を得たため、許可を得てその旨を記載した。

裏面：テーマ「レトロ」を取りあげた理由や、学生のおすすめポイント、マップを作った時の様子が伝わるようなエピソードとして、第1回の実地調査での思い出を新聞のレイアウトや配色をイメージして記載した。

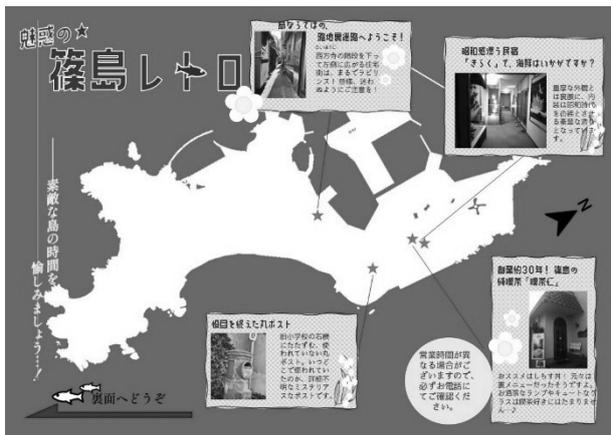


図3 篠島レトロ (表面)



図4 篠島レトロ (裏面)

②絶景スポット(図5、6)

表面：篠島の白地図に、スポットの名称とともに吹き出しに学生による景色の撮影おすすめ時間帯を記載した。加えて、スポットの簡単な情報と、実際に撮影した景色の写真も載せている。中には、到達までの道のりが険しくて注意を要するスポットも取りあげているため、注意点も併せて記した。

裏面：アクセス情報や目印となるもの、撮影ポイントの詳細、作成者によるコメントを記した。

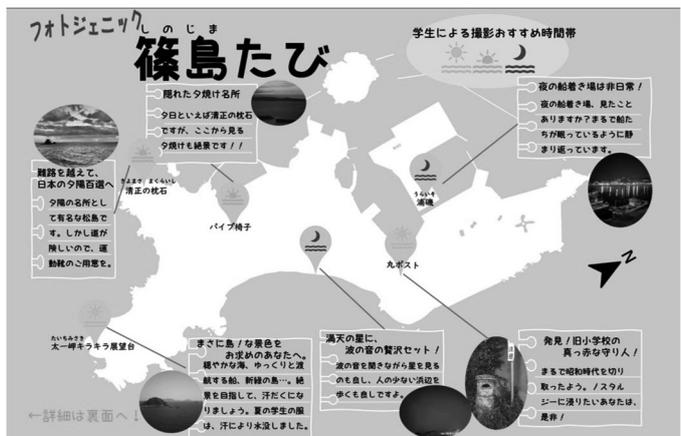


図 1 フォトジェニック篠島たび (表面)



図 6 フォトジェニック篠島たび (裏面)

③歴史(図 7、8)

表面：ピックアップした計 10 カ所のスポットを、知多四国霊場コース、伊勢神宮コース、名古屋城コース、南北朝コースの 4 つのコースに分けた。知多四国霊場コースは^{ふだしょ}札所巡りに特化したコースで、伊勢神宮コースは約 1200 年以上のつながりを持つ篠島と伊勢神宮の歴史を感じることができるコースとなっている。また、名古屋城コースは名古屋城築城の際に加藤清正が石垣を採石した地を巡ることができるコースであり、南北朝コースは南北朝時代に篠島に漂着した南朝の^{のりよし}義良親王ゆかりの地を巡るコースを作成者が組み、それぞれ巡るスポット順に漢数字で示し、テーマごとに色を分けた。

裏面：スポットの基礎情報に加え、アクセス情報を記載した。他のマップと比較して記載した観光スポットが多かったため、学生コメントを記すことはできなかった。



図 7 篠島之歴史図 (表面)



図 8 篠島之歴史図 (裏面)

④パワースポット (図 9、10)

表面：ここでは、篠島内にある神社と恋人の聖地を取りあげ、神社の絵馬を模した図形を背景とし、スポットの名称とスポットの説明書きを記した。寺社仏閣をめぐる地図は既に存在したが、恋人の聖地とあわせて記載したマップはみられなかったため、今回は「パワースポット」として紹介している。

裏面：各スポットのご利益と、アクセス情報に加え、表面では書ききれなかった情報や、島民への聞き取りによって得た情報を記した。ここで記したご利益は、篠島で配布されていた「神宿る島 篠島」の地図を参考に記載した。



図 9 篠島パワースポット巡り (表面)



図 10 篠島パワースポット巡り (裏面)

⑤小径(図 11、12)

表面：第1回・第2回実施調査を通して発見した島ならではの特徴的な道を、5か所取りあげた。具体的には、篠島観光協会の方々とは話す中で判明した路地裏の

ような道や、標高の高い篠島だからこそ、島を一望できる道を記した。足跡のアイコンでスポットの位置を示し、学生の歩いてみた体験談やおすすめポイントを記載している。

裏面：他のマップと同様、スポットまでの道のりと「学生と太話」と題して作成者によるおすすめポイントや歩いて感じた注意点を記した。また、ここで取りあげたスポットのほとんどが公式の場所ではなかったため、スポット到着に要する時間に加え、ランドマークとなる建物からの行き方も簡単に記載している点の特徴である。



図 2 篠島小径 (表面)

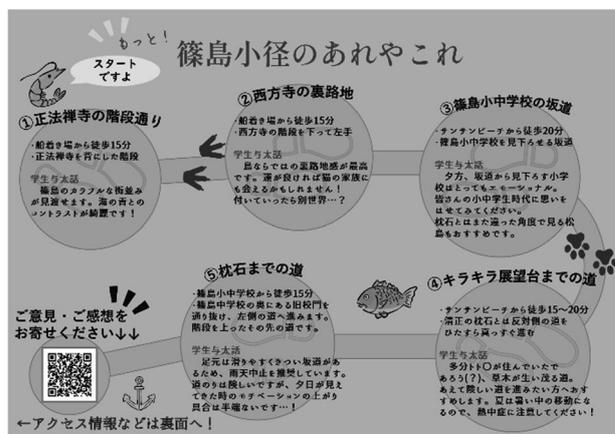


図 12 篠島小径 (裏面)

⑥ ハザードマップ (図 13、14)

表面：初めて篠島を訪れた観光客でも、津波などの災害が起きた時に一目でどこへ避難したら良いか分かるようなデザインを目指した。避難場所の位置、浸水想定域など必要最低限の情報に絞って記載している。また、浸水想定域を分かりやすく色で表すために、「国土数値情報 (津波浸水想定データ)」(国土交通省) (<https://nlftp.mlit.go.jp/ksj/gml/datalist/KsjTmplt-A40-2024.html>) を利用し、本マップ担当者が GIS ソフト MANDARA10 で作成した。

裏面：最低限の情報に絞った表面とは反対に、それぞれの避難場所の詳細や、災害が起きたらどうすれば良いかという注意書きを記した。また、本マップ作成時に使用した出典情報や、参考にした文献情報を記載した。ハザードマップとして配布するにあたり、誤情報がないよう注意して作成する必要があると考えた。そのため、第 2 回現地調査では南知多消防組合篠島分遣所の方々にご協力いただき、試作品の情報を確認した。

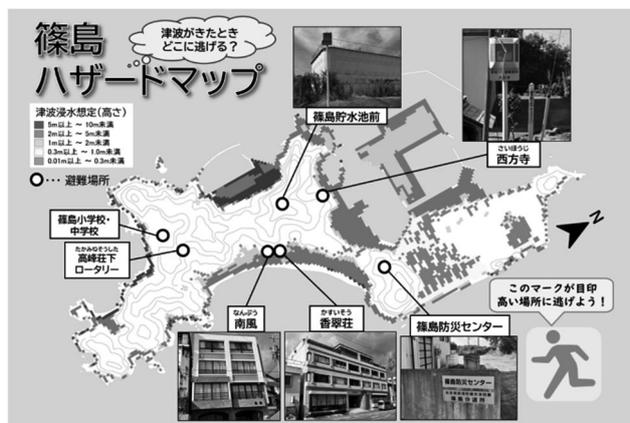


図 13 篠島ハザードマップ (表面)



図 14 篠島ハザードマップ (裏面)

また、クリアファイルについては当初の予定通り、表面には篠島の外枠、道を記載した。篠島は細い道が多いため、地図上でも道の様子が少しでも分かるように太い道を茶色、細い道を薄い茶色に区別して、国土地理院地図を Adobe Illustrator を利用し、トレースした。裏面については、下記のA～Eの内容を記載した。

A. マップの使い方

通常の観光マップとは異なるため、気になるマップを一番前にしてクリアファイルに入れて使うものであることを説明した。

B. 観光マップ使用にあたっての諸注意

篠島は入り組んだ道であり、かつ今回のマップは公式な観光スポット以外にも取りあげていたため、利用者が今回のマップを使用して迷った際には、すぐに引き返すことを記載し、注意喚起を行った。

C. 観光マップ制作秘話

学生が作ったものであることを使用者にも知っていただけるよう、研究の主旨を記載し、地図の特性を説明した。

D. マップの特徴

既存の観光マップとは異なり、持ち歩きやすいカバン型であること、観光マップとしての使用後にはミシン目に沿って切り離し、クリアファイルとして再利用できる旨を記載した。

E. アンケート協力をお願い

観光マップのフィードバックを集めるため、アンケート実施のお願いの旨を記載した。

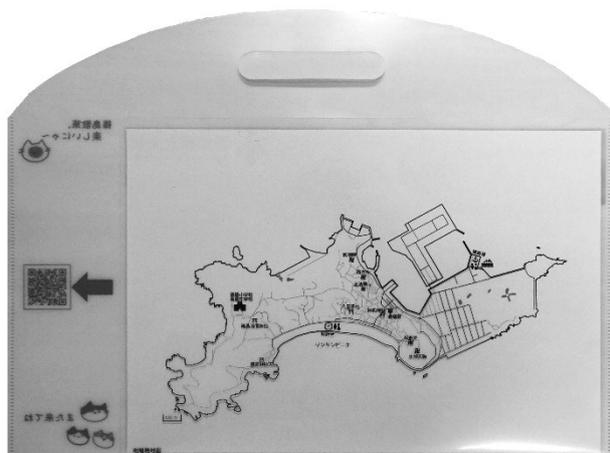


図 3 クリアファイル（表面）



図 16 クリアファイル（裏面）

2.4 篠島における試作品の検証

試作品の検証を行うために、2025年11月に試作品4部を観光客に使用してもらい、Google formsを利用して、フィードバックをいただいた。4人中3人の方から回答を得ることができた。「篠島小径」の裏に記載した文章が分かりにくかったことや、行くのに難易度を付けてほしいという意見があがった。また、クリアファイルのサイズについて、「小さくたたんでカバンやポケットに入れておけるサイズにしてほしい」という指摘を受けた。

3. 研究活動の最終的な成果物について

3.1 試作品の修正

11月24日に行った第3回実地調査で寄せられたフィードバックや、篠島観光協会の方々から伺った意見を元に試作品を修正した。

▶ クリアファイル

表面に関しては、道や目印となる建物などランドマークの細かな位置を調整した。また、試作品ではお手洗いや港の場所を示すマークがなく、分かりにくかったため追加した。裏面においては、Google formsのQRコードの追加を行った。他にも、試作品では余白が目立っていたためイラストを追加した。

▶ マップ

「篠島小径」では、裏面の「学生と太話」の言葉遣いが難しく分かりにくいという点から、かみ砕いた分かりやすい表現に修正した。また、「歴史」では観光スポットの位置を示すマークが見にくいという意見を受けて色や配置を修正した。



図 17 試作品検証の様子
(2025年11月24日撮影)

3.2 完成版観光マップの刊行および配布

完成版観光マップは100部刊行し、内10部を保存用、90部を配布用とした。これらの完成版観光マップは2025年12月18日に篠島へ持参した。配布にあたっては、篠島観光協会ご協力のもとで島の駅や宿泊施設に設置した。島の駅では、既存の観光マップがまとまって配布されている場所の一角に設置することで、篠島港に到着してすぐに手に取ってもらえるようにした(図18)。また、8つの宿泊施設にも設置した(図19)。宿泊施設にも設置を依頼した理由としては、観光客が宿泊中にマップを読む時間ができる可能性がある点や、非常時に観光客向けハザードマップを活用できる可能性がある点が挙げられる。



図 18 観光マップ設置の様子(島の駅)
(2025年12月18日撮影)



図 19 観光マップ設置の様子(香翠荘)
(篠島観光協会提供)

4. おわりに

4.1 まとめ

新たな観光マップを通じて、地域の魅力を伝えられる観光マップの作成を目標に据えて本研究活動を行った。結果として、「こんな観光スポットがあるなんて知らなかった」などの意見が寄せられた。よって、当初の目標である、既存の観光マップでは伝わりきらない観光スポットの魅力に焦点を当てることを達成することができたと言える。一方で、観光マップの配布時期の都合により、十分なフィードバックの回答数を得られなかったという課題が残った。この点に関しては、春や夏に向けて観光客の増加に伴い、観光マップの利用者も増えると予想される。したがって、研究期間後も利用者から寄せられたフィードバックを篠島観光協会に共有し、本研究が観光の一助となれば幸いである。

4.2 謝辞

指導教員として調査時、観光マップ作成時など様々な場面で多くのご指導や助言をくださった日本文化学部服部亜由未先生に深く感謝申し上げます。

観光マップの作成、配布について快く受け入れてくださり、ご助言いただきました篠島観光協会、南知多消防組合の皆様、聞き取り調査に快く応じてくださった篠島の皆様に深く感謝申し上げます。



学生自主企画研究・活動 成果レポート

| | |
|-------------|--|
| 研究課題 | 普門寺の前近代文献資料による東海地域社会史 の将来展望的構築 |
| 研究代表者 | 日本文化学部 歴史文化学科 氏名長尾愛梨 |
| グループ 構成員 | 〈正規構成員〉 笠井大稀、清水若奈、遠山諒人、戸塚晴菜、中村優花、深谷大 悟、土屋穂波、長尾愛梨、横井萌衣 〈研究協力者〉 井戸裕貴、杉江綾乃、梅村旬平、浅野七帆、谷川未来 |

目次

1. はじめに
2. 研究概要
3. 研究目的
4. 活動スケジュール
5. 活動概要
 - 5.1 週一回の検討会
 - 5.2 龍谷ミュージアムへの訪問
 - 5.3 普門寺での活動
 - 5.3.1 普門寺での調査
 - 5.3.2 もみじ祭りでの取り組み
 - 5.4 「普門寺史」の作成
6. 研究成果
7. 今後の課題
8. おわりに
9. 謝辞
10. 参考・引用文献

1. はじめに

愛知県立大学中世史研究会は2008年度以来、普門寺の文献調査を行ってきた。普門寺とは愛知県豊橋市にある真言宗の寺院である。学生自主企画研究・活動では、普門寺を支えてきた地域を対象に、フィールドワークや報告書の公刊など活動を続けてきた。

昨年度では、地域生活者の視点から普門寺の歴史を考察し、パブリック・ヒストリーの実践を試みた。パブリック・ヒストリーとは、アカデミックな立場である歴史学者と非専門的な一般の人が交わり、その歴史や歴史の考え方に意識的・能動的に関与する研究や実践（菅 2019）である。

今年度は昨年度の活動を引き継ぎながら、地域社会の歴史を考察することを通して、東海地域の将来展望的構築を目指すものである。

2. 研究概要

豊橋市雲谷町に所在する船形山普門寺（図1）を中心に、地域住民の視点から地域社会の歴史を考える。地域住民の生活や文化、経済など多様な側面のある地域社会史について、歴史の中に生きた人々の痕跡、地域社会の具体的な姿や特徴を見出していく。

そのために必要となるのが、中世以後の豊富に残されている史料である。研究基盤となる文献調査を徹底し、成果をまとめていく。新しく見つかった史料などの再調査・修正を行い、豊橋市教育委員会による『普門寺旧境内—総合調査編一』（2016年）の補訂作業を行う。

この研究では普門寺の歴史および地域社会を考える上で、愛知県という地域に限定せず、東海地域という更に広い範囲に目を向ける。

また、昨年に引き続き、パブリック・ヒストリーを普門寺のもみじ祭り（図2）で実践する。一般の方に向けて文化財の解説を行い、これまでの成果を地域の方々と共有していく。また、一般の方々へ向けた「普門寺史」を作成する。ここには古代から近世までの通史編のほか、普門寺所蔵の文化財についてのコラムを執筆する。



図1：普門寺の位置
（地理院地図をもとに作成）



図2：もみじ祭りポスター

3. 研究目的

普門寺の前近代文献資料に基づき、「普門寺史」の作成を通して東海地域を考えていくことが目的である。

近年、『東海の中世史』シリーズ（全5巻、2024年、吉川弘文館）の刊行をはじめとする研究動向により、東海地域への関心が高まっている。このような背景に加えて、普門寺が三河と遠江の国境に位置し、地域住民の生活を信仰的に支える拠点であることから、住民などの被支配者層を視点にすえて東海地域を考えることは重要だと考えた。

これからさらに活発になっていくだろう東海地域社会史の研究を、普門寺という一つの事例を足掛かりにして将来展望を構築していく。

4. 活動スケジュール

活動の実施スケジュールは以下の通りである。

| | |
|-----------|---------------------|
| 4～7月 | 先行研究の調査、普門寺での実地調査 |
| 8月12、13日 | 龍谷ミュージアム（京都市）で意見交換会 |
| 9月10、11日 | 普門寺での実地調査 |
| 10～1月 | 週1回の検討会 |
| 11月22、23日 | 普門寺もみじ祭でギャラリートーク |

2027年秋に京都市の龍谷ミュージアムにて普門寺に焦点を当てた特別展が開催される予定である。

5. 活動概要

5.1 週一回の検討会

6月から7月にかけて、週に一回集まって、主に普門寺に関する文献史料の精読をおこなった。普門寺縁起をはじめとする史料を読み込み、普門寺の成立や歴史的背景について基礎的な理解を深めた。

5.2 龍谷ミュージアムへの訪問

8月には、2027年に普門寺展を行う予定の龍谷ミュージアムを訪れ、学芸員の方と対談をおこなった。展示の構成方法や史料の見せ方、来館者への伝え方について直接お話を伺い、大学での研究と博物館実務とを結びつけて考える貴重な機会となった。また、龍谷ミュージアム訪問に合わせて、京都の寺院のフィールド調査も実施した。



図3 龍谷ミュージアム訪問の様子

5.3 普門寺での活動

5.3.1 普門寺での調査

7月、9月は普門寺にて文献調査と史料整理を行った。

7月の普門寺調査では史料の実見調査や写真撮影も行い、後のイベントの展示準備に活用した。この時期の活動は、以後の調査や展示の基盤となる重要な期間となった。

9月の普門寺調査では多数の史料を一点ずつ確認し、内容や年代、状態などを整理した。この作業によって普門寺に伝わる史料の全体像が明らかになり、後のイベントの展示テーマ設定にも繋がった。



図4 7月の普門寺調査の様子



図5 9月の普門寺調査の様子

5.3.2 もみじ祭りでの取り組み

もみじ祭りの開催期間内にあたる11月22日、23日に、史料の展示やギャラリートークの実施といった活動をおこなった。客殿にて「古代・中世の普門寺」をテーマとした展示を、収蔵庫（仏像館）にて「近世の普門寺」をテーマとする展示をおこなった。以下に示すのが展示した主な史料と展示レイアウトである。

| | |
|--------------|---|
| 客殿 | <ul style="list-style-type: none"> ・『大般若経』巻第366（大治2年[1127]） ・今川義元判物（天文18年[1549]） ・木造阿弥陀如来坐像（鎌倉時代[13世紀]） |
| 収蔵庫 （仏像館） | <ul style="list-style-type: none"> ・木造阿弥陀如来坐像（平安時代[12世紀]） ・木造四天王立像 *広目天と増長天のみ（平安時代[12世紀]） ・普門寺梧桐岡院縁起（天文3年[1534]） ・今川氏真朱印状（永禄4年[1561]） ・星供次第（万治3年[1660]） ・普門寺由緒等書上（寛文5年[1665]） ・黄檗版『大般若経』（貞享元年[1684]） ・普門寺境内指図（寛政2年[1790]） |

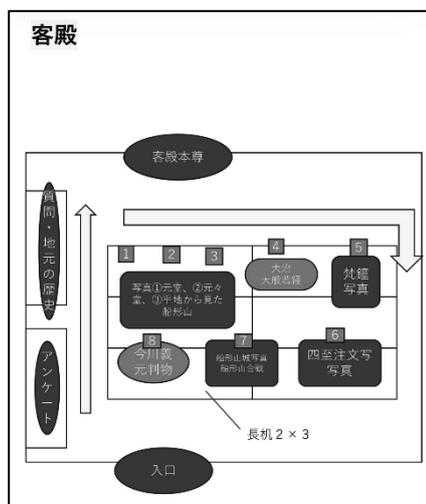


図6 客殿展示レイアウト

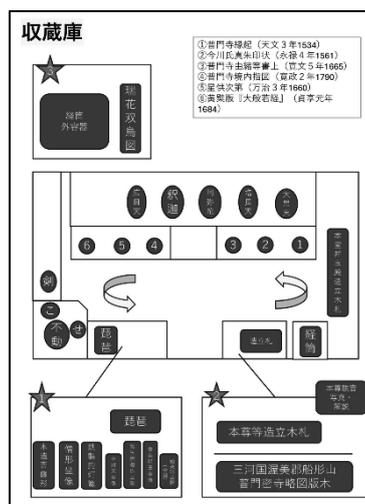


図7 収蔵庫（仏像館）展示レイアウト

客殿では普門寺の地理的条件とそれが普門寺の歴史を考えるうえでどのようにかかわるのかについて、上記の史料に加えてパネルや画像を用いて紹介した。収蔵庫（仏像館）では災害や兵火を切り抜け、近世寺院へ変容していく際に、普門寺がどのような問題に直面し、乗り越えてきたのかについて、上記の史料を用いて紹介した。

ギャラリートークは1日目に2回、2日目に3回の計5回実施した。客殿と収蔵庫（仏像館）にてそれぞれ30分程度、複数人で分担しておこなった。各々が興味・関心をもった史料について、どうしたらよりよい解説ができるのか、歴史や地域社会について考える機会を提供できるのかについて熟考し、試行錯誤しながら取り組んだ。また、参加者の方々の反応や質問に我々も学び、回を重ねるごとにブラッシュアップしたギャラリートークをおこなうことができた。

当初は2日間とも2回の開催を予定していたが、想定以上にたくさんの方がいらっしやっただため、2日目は3回開催する運びとなった。より多くの方に普門寺の歴史について考えていただく機会を提供することができた。



図8 客殿の展示



図9 収蔵庫の展示



図 10 収蔵庫ギャラリートークの様子



図 11 客殿ギャラリートークの様子

これらの取り組みに加えて私たちは、パンフレットの配布とアンケートの実施もおこなった。パンフレットは普門寺の受付にて普門寺の関係者の方に配っていただいた。展示史料の説明に加えて、普門寺と地域社会、普門寺と文化財といったテーマも含めることで、来訪された方々に歴史や地域について考えていただく機会を提供できた。アンケートを用いて、①どこから来たのか②きっかけ③以前訪れたことはあるかの3点を調査した。①については愛知県豊橋市が一番多かったが、静岡県湖西市、浜松市を含めた近隣の市町村からいらっしゃった方もたくさんいた。②については圧倒的に紅葉狩りを目的とした方が多かったが、そういった方々にもこの機会を通して歴史に触れる経験を提供することができた。③についてははじめてと答えた人が多くを占めたが、毎年紅葉や本尊の御開帳を目当てに来ると答えた方もいらっしゃった。これらのアンケートは、情報収集の手段のみならず、様々な方と対話をするきっかけづくりにもなった。



図 12,13 パンフレット画像

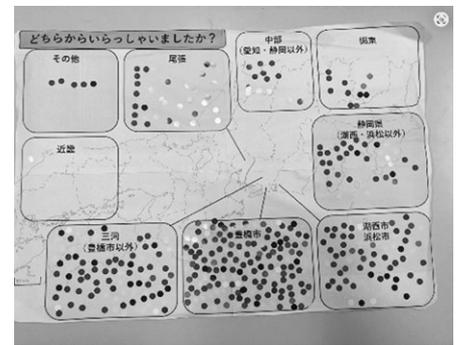
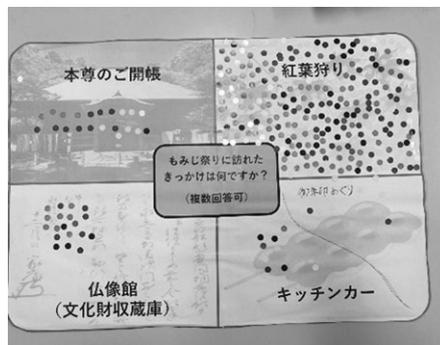
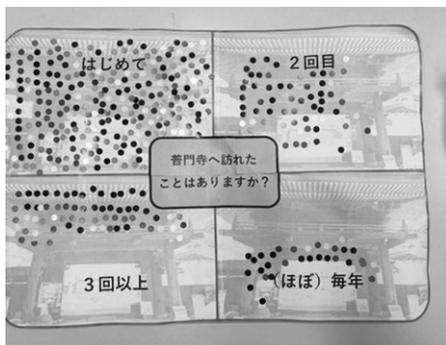


図 14,15,16 アンケート画像

5.4 「普門寺史」の作成

「普門寺史」の作成は10月中旬ごろから本格的に始動した。研究協力者である大学院生が古代から近世にかけての普門寺通史編を担当し、学部生は興味をもった史料について考察したコラムを作成することになった。普門寺の歴史だけでなく、もみじ祭りでの体験記や現在の普門寺キャラクターについての内容も含めるなど、幅広いテーマを扱った。以下がその構成である。

| | |
|-----|------------------------------|
| 通史編 | 古代の普門寺 |
| | 中世普門寺のネットワーク |
| | 中世後期における三遠国境地域 |
| | 近世の「普門寺史」 |
| コラム | 中世普門寺と地域住民 |
| | 本尊造立等木札と普門寺復興 |
| | 琵琶「小々波」の基礎的研究 |
| | 近世初期「星供写」について |
| | 近世普門寺における女性の存在 |
| | 普門寺もみじ祭りにおけるパブリックヒストリー実践を通して |
| | 普門寺仏像キャラクターはどのように位置づけられるか |

11月から1月にかけて週に一回、内容について意見を交わす機会を設けた。4月から7月にかけて精読した先行研究をベースに、それぞれが設けたテーマについて研究を重ねた。今後、この「普門寺史」をPDFにして、普門寺のホームページに掲載していただく予定である。また、一部印刷・製本をおこない、普門寺や龍谷ミュージアムなど今までお世話になった方々へお送りする予定でいる。

6. 研究成果

この活動を通して得られた成果は主に2点である。

1点目は普門寺史料に関することである。私たちは9月に行われた調査および全史料の整理作業によって、『普門寺旧境内—総合調査編—』（2016年）の補訂を行うことができた。長年にわたって行われてきた普門寺調査の一つの節目として、文献史料を含む様々な文化財を後世に残していくための有意義な活動をおこなうことができた。

2点目はパブリック・ヒストリーの実践についてである。私たちはこれを試みるにあたって、上述したギャラリートークの実施と「普門寺史」の執筆を軸とした。ギャラリートークを通して、私たちは昨年の課題であった「多くの人に等しく歴史を共有する」ということを実現できた。龍谷ミュージアムで学んだことを念頭に置きつつ、分かりやすく、親しみやすい解説を行うにはどうすればよいのか、各々が考えるきっかけになったと思う。また実際に参加者のリアクションを

受けることで、アカデミックな世界の外にいる人がどういった点に関心や疑問を抱くのか、など私たちとしても新たな学びを得ることができた。これらはパブリック・ヒストリーの将来展望を考えるうえでも貴重な経験になったと考える。さらに「普門寺史」作成を通して、「雑誌制作」を新たなパブリック・ヒストリー実践として位置づけることができた。雑誌（モノ）として後世に残すこと自体がパブリック・ヒストリーの実践になるという門間卓也氏の考え方に学び、私たちも実行することで新たな可能性を展望することができた。これらの活動や実践を通して、地域の歴史について生活者を主体にすえて考えるという方法論の構築に寄与することができたと考える。

7. 今後の課題

今回の活動であげられた反省点の一つに、もみじ祭りにおいて来訪された方と一対一で向き合う機会が昨年比べて少なくなってしまったという点がある。これはギャラリートークをおこなった影響もあると考えられるが、実際に一般の方と対話をし、意見や疑問、知識を交わす時間を存分にとれなかったことは、大きな課題であると考えている。私たちは今後もよりよい方法論を構築していくために、議論を重ねていこうと思う。また、「普門寺史」についても発信の段階にとどまってしまっているのが現状である。私たちが作成した「普門寺史」がアカデミックな世界の外にいる人々にどのように影響するのか、そして私たちはそこから何を学べるのか、今後の動向についても追っていききたいと思う。

8. おわりに

今回の活動を通して、パブリック・ヒストリーの重要性について実感するとともに、その難しさや課題を改めて痛感した。今年新たに取り組んだギャラリートークや「普門寺史」の作成から得られた学びもたくさんあったが、一方で今後検討していくべき課題が残っているのも現状である。しかし、今回の活動を通して、歴史史料を媒介にアカデミックな世界から離れた空間において、パブリック・ヒストリーの観点をういた歴史実践を行うという取り組みの一例を示すことができたのではないだろうか。今後も様々な議論が交わされて、発展していくであろうパブリック・ヒストリーの動向を敏感に察知し、私たちもその流れに積極的に関わっていききたいと思っている。

9. 謝辞

本活動を進めるにあたり、たくさんの方々のご支援、ご協力を賜りました。指導教員の日本文化学部歴史文化学科上川通夫先生には計画にあたり多大な助言とご指導をいただきました。

また、普門寺住職の林義将様と前住職林隆清様には、私たちの調査を受け入れていただき、貴重な史料の展示をご快諾いただくなど、多大なるご厚意を賜りました。心より感謝申し上げます。そして、龍谷ミュージアムの村松加奈子様には企画の開催にあたり貴重なアドバイスをいただきました。感謝申し上げます。最後に普門寺にて開催された「普門寺古文献史料展示会・歴史ボランティアガイド」にご参加いただいた皆様にも改めて感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

10. 参考・引用文献

- ・菅豊「パブリック・ヒストリーとはなにか？」(菅豊、北条勝貴編『パブリック・ヒストリー入門-開かれた歴史学への挑戦』勉誠出版、2019年)
- ・龍谷ミュージアムホームページ (<https://museum.ryukoku.ac.jp/>)
(最終閲覧日 1/27)
- ・戸田芳実「文化財保存と歴史学」(『岩波講座日本歴史』25 [別巻 2 日本史研究の方法]、岩波書店、1976年)
- ・三枝暁子「「歴史」の共有と継承ー京都 西京神人を例としてー」(歴史科学協議会編『歴史評論』歴史科学協議会、2025年6月号)
- ・『普門寺旧境内ー総合調査編ー (豊橋市埋蔵文化財調査報告書第141集)』(豊橋市教育委員会、2016年)

学生自主企画研究・活動 成果レポート

| | | | |
|-------------|------------------------|--------|-------|
| 研究課題 | 「困難若年女性」についての安全な居場所の要件 | | |
| 研究代表者 | 教育福祉学部 | 社会福祉学科 | 加藤舞乙 |
| グループ 構成員 | 教育福祉学部 | 社会福祉学科 | 安藤こはる |
| | 教育福祉学部 | 社会福祉学科 | 伊藤紫乃 |
| | 教育福祉学部 | 社会福祉学科 | 大岡 栞 |
| | 教育福祉学部 | 社会福祉学科 | 尾関野乃花 |
| | 教育福祉学部 | 社会福祉学科 | 山田知佳 |

はじめに

1.研究背景

2022年に「困難な問題を抱える女性への支援に関する法律」(女性支援新法)が成立し、2024年4月に施行された。法の対象は「困難な問題を抱える女性」であり、厚生労働省の説明によると「性的な被害、家庭の状況、地域社会との関係その他の様々な事情により日常生活または社会生活を円滑に営む上で困難な問題を抱える女性(そのおそれのある女性を含む)」とされる(厚生労働省社会・援護局地域福祉課女性支援室 2025「困難な問題を抱える女性への支援について」)。

また、児童虐待件数や不登校児童の生徒数が増加するなど、子ども・若者を取り巻く状況も深刻化している。2021年に閣議決定された「こども政策の新たな推進体制に関する基本方針～こどもまんなか社会を目指すこども家庭庁の設立～」(令和3年12月21日閣議決定)は、こどもの居場所づくりを重要な施策として位置付けている。そして「こどもの居場所づくりに関する指針」(令和5年12月12日閣議決定)は、こどもの居場所づくりが重要となっている背景として、以下の3点を指摘している。一つ目は、地域コミュニティが変化し、空き地や路地裏、近所の駄菓子屋など、以前は特に意図せずともこどもの居場所となり得ていた場や関係性が減少していることである。二つ目は、児童虐待の相談対応件数の増加や不登校、自殺するこども・若者の数の増加など、こども・若者を取り巻く環境が一層厳しさを増すとともに課題が複雑かつ複合化していることである。また特にそうした厳しい状況下にいるこども・若者ほど居場所を持ちにくく、失いやすいと考えられる。三つめは、価値観の多様化や文化の広がりに伴い、こども・若者のニーズも多様化しているため、それらに応じた多様な居場所が求められるようになっていることである。

中でも若年女性は特有の困難さを抱えている。女性をめぐる課題は、生活困窮、性暴力・性犯罪被害、家庭関係破綻など複雑化、多様化、複合化して生じており、特に以下を挙げることができる。①家族関係の悪化や家族の崩壊、きょうだい間の差別、②親からの暴力、親やきょうだいからの性暴力、性暴力・性被害、③貧困・経済的困窮、④性搾取、⑤居場所の喪失、社会的孤立、⑥学校教育からのドロップアウト（いじめ、不登校、高校中退）、⑦就労機会・継続からの排除やドロップアウト、不安定な就労環境・低賃金、⑧予期せぬ妊娠、中絶とそのトラウマ、孤立した環境での出産と子育て、⑨心身の健康の侵害や障害—うつ、精神疾患や精神障害、知的障害、発達障害、⑩自死念慮、自殺未遂、リストカット・オーバードーズ（自傷行為）などである。

厚生労働省は女性支援新法の説明の中で、こうした様々な悩みを抱えた若年女性は自ら悩みを抱え込み問題が顕在化しにくく、また公的機関への相談はハードルが高いなどの理由から支援につながりにくいことを指摘している。（「困難な問題を抱える若年女性に対する支援スタートアップマニュアル」）

2. 先行研究の動向

困難若年女性に関する先行研究の動向は以下のとおりである。

「女の子と若年女性にとっての居場所～「わたカフェ」の現場での気づきから～」（公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン）では、15～24歳の女の子のための居場所支援の経験や利用者へのアンケートなどから、信頼でき、安心して話せる人と場所があることが、自己効力感を高めるとしている。北川（2023）では、「わかくさりビング」の活動経験から、専門性がなくても地域で運営できる居場所が家庭の代わりとなり、若者を育てる機能を果たしていると述べられている。また、山尾（2025）は「若者ミーティング」に参加した若者たちの語りを通して、スキル支援だけでなく、「自己信頼を回復する場」としての居場所の重要性を示している。つまり、居場所には若者の自己効力感や自己信頼感を高める効果があり、若者を育てる機能を担っていることを示唆している。

しかし、困難若年女性の居場所に関する質的研究は少ない。そのため、当事者である女性たちに一番近い所にいる支援者にインタビューを行い、彼女たちの居場所の要件に関する研究を行う。

3. 目的

そこで本研究では、物理的な居場所がなく、様々な問題や困難を抱える若年女性への心のケアをするための安全な居場所にはどのような要件が求められるのかを明らかにすることを目的とする。

4. 方法

本研究では、「困難若年女性」のニーズに基づいた支援の在り方を、文献分析

とインタビュー調査から成る質的研究を通して検討する。

まず、先行研究及び文献を用いて、困難若年女性が抱える問題の背景や経緯と、先行支援事例からの支援の実態に関する情報を収集し検討する。次に、支援団体を対象とした半構造化インタビューを行い、困難若年女性が抱える問題の背景や経緯と、困難若年女性が抱える課題やニーズに関する情報を収集する。

インタビュー調査の対象として支援団体の支援者を選定した理由には、積極的なものと消極的なものがある。積極的な理由として、支援者は困難若年女性の最も身近で相談に乗っている立場であるため、様々な支援経験を語ってもらい、多くの情報を得ることができると考えたためである。また、支援者は権利擁護に取り組む専門職であり、混乱している当事者の言葉を代弁できる存在であると考えたためである。次に消極的な理由として、年齢が近く同性の自分たちが当事者に近づくことは当事者を圧迫しかねない。また当事者は話ができず混乱状態にある人たちのため、直接話を聞くことは心的侵襲性が高いと考えたためである。

先行研究および文献調査と、インタビュー調査での結果を照らし合わせ、データのユニット化、コード化、カテゴリー化による分析を通して、若年女性の居場所に求められる要件について考察する。

5.用語の定義

本研究では、法律や先行研究を参考に、以下のように用語を定義する。

「様々な問題や困難を抱える若年女性」を、「居場所がなく家を出た少女、性虐待や性搾取の被害者、家庭関係の破綻、生活困窮等の複雑化、多様化、複合化した問題を抱える18歳未満の女性。これらの事情により日常生活または社会生活を円滑に営むことが困難な女性」と定義する。また以後、困難若年女性とする。

(女性新法概要「困難な問題を抱える女性への支援に関する法律」(令和6年4月1日施行))

「居場所」とは、「それがどんな場所、時間、人との関係性であっても子ども・若者本人にとって居心地がいいと思える場所であること」と定義する。「子どもの居場所づくりに関する調査研究」(こども家庭庁)

そして北川(2023)を参考に、「安全な居場所」とは、「食事、入浴、睡眠といった生活の基盤が保障される場所・暴力や搾取の危険から隔離された空間・支援者(福祉・医療・心理・法律など)と出会える場所・本人の意思が尊重される対話的・信頼的な環境・社会復帰の足がかりとなる教育・就労支援の提供がされる場所」であると定義する。

6.倫理的配慮

本研究は、「愛知県立大学研究倫理eラーニング」を受講し、日本社会福祉学会「研究倫理規程」・「研究倫理規程にもとづく研究ガイドライン」に基づいて進

める。

* 日本社会福祉学会研究倫理規程

https://www.jssw.jp/wp-content/uploads/ethics_2018.pdf

* 日本社会福祉学会研究倫理規程にもとづく研究ガイドライン

https://www.jssw.jp/wp-content/uploads/research_guidelines_2018.pdf

I. 困難若年女性が直面する「困難」の現状

困難若年女性がどのような「困難」を抱えているのか現状を調査した。その内容を虐待・性被害、不登校・いじめ、貧困、自殺という項目で以下のようにまとめた。

1. 虐待、性被害

2023年度の児童相談所における児童虐待相談件数は、過去最多の225,509件にのぼっている（厚生労働省「令和5年度福祉行政報告例」）。また2023年における児童買春事犯等の検挙件数は4,418件で、前年から増加傾向にある。SNSに起因する事犯の被害児童数は、2019年から4年連続減少しているものの、依然として高い水準で推移しており（警察庁）、被害の拡大と潜在化がみられる。

「令和6年におけるストーカー事案、配偶者からの暴力事案等、児童虐待事案等への対応状況について」（警察庁）によると、2024年の配偶者からの暴力事案等の相談等件数は94,937件に達し、DV防止法施行後過去最多を記録している。

2. 不登校、いじめ

いじめの件数は年々増加している。「令和6年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果概要」（文部科学省）によると、2024年度のいじめの認知件数は小中高等学校及び特別支援学校で計769,022件であり、前年度の732,568件より36,454件増加し、過去最多となった。また、2024年度の小・中学校の不登校児童生徒数は353,970人で、こちらも過去最多を記録した。

3. 貧困

厚生労働省によると、日本における17歳以下のこどもの貧困率は11.5%（2021年）であり、約8.7人に1人のこどもが貧困状態にあるともいわれている。中でもひとり親家庭の相対的貧困率は、44.5%（2021年）と高い水準にある。家庭が相対的貧困の状態にあることで、健やかな成長に必要な生活環境や教育の機会が確保されず、次世代への貧困の連鎖にもつながる恐れがある。

4. 自殺

さらに、「令和6年中における自殺の状況」（厚生労働省・警察庁）によると、小中高生の自殺者数は529人であり、過去最多を更新した。また20歳未満の女子の自殺者数は430人で、370人の男子を初めて上回った。推移を見ると、男

子は横ばい傾向であるのに対し、女子はここ 5 年で急増しており、男女間の格差が広がっている。

5.まとめ

こうした若年女性の抱える問題の複雑化・多様化・複合化に対応すべく、2022 年に「困難な問題を抱える女性への支援に関する法律」（困難女性支援法）が成立した。この法では、公的機関と民間団体の連携・協働により、早期から切れ目ない支援を実施することが意識されている。

しかし、支援体制の不十分さは未だ課題である。「生きづらさを抱える女性の支援にかかわる団体の活動実態調査 報告書 2022 年度」（一般社団法人若草プロジェクト、特定非営利活動法人日本 NPO センター）では、調査に対し回答が得られた 228 団体のうち 161 団体が生きづらさを抱える若年女性に対して何らかの支援を行っているとしている。161 団体のうち、東京都では 28 団体、愛知県では 5 団体が支援を行っているが、鳥取県や徳島県、高知県で生きづらさを抱える女性への支援を行っている団体は確認されておらず、支援団体数の地域間格差がみられる。また、161 団体のうち居場所の運営を行っている団体は 46.6%であった。

困難若年女性の抱える「困難」は近年深刻化しており、支援のニーズが高まっていること、その一方で彼女たちへの支援が不十分であることが明らかになった。

II.インタビュー調査

1.インタビュー調査概要

インタビュー実施日、場所、インタビュー対象者は表 1 の通りである。愛知県 2 か所、東京都の 2 か所の合計 4 つの支援団体の、合計 8 名の支援者にインタビューを行った。インタビュー対象者は、居場所・相談事業担当職員、カウンセラー、保健体育教諭、心理士、支援団体代表者等である。7 月 31 日から 9 月 28 日にかけて、一か所につき一回のインタビューを行った。

インタビュー実施に先立って、質問項目と倫理的配慮に関する説明を書面にてあらかじめ送付し、インタビュー前に口頭で同意を得た。

表 1 インタビュー調査の実施概要

| | インタビュー実施場所 | インタビュー日時 | インタビュー(学生)人数 | インタビューした支援者の立場と人数 |
|-----|------------|----------------------|--------------|--------------------------------|
| 団体A | 愛知県 | 7月31日 11:00-12:30 | 4人 | 居場所・相談事業 担当職員2名 カウンセラー2名 |
| 団体B | 愛知県 | 8月16日 9:30-12:30 | 4人 | 代表(保健体育 教諭)1人 |
| 団体C | 東京都 | 9月22日 11:00-12:00 | 3人 | 心理士1人 |
| 団体D | 東京都 | 9月28日 15:00-16:00 | 3人 | 代表1名 支援者1名 |

質問項目は、以下の5つである。

- ① 女性たちへの支援として何を実施しているか
- ② 女性たちはどのように支援のを知り、利用に至ったのか
- ③ 居場所を利用する女性たちはどのようなことに困難や不安を抱えているのか
- ④ 女性たちが居場所支援に何を求めて利用しているのか
- ⑤ 居場所を運営する上での工夫、居場所の社会的意義と運用困難さについてまた、倫理的配慮として以下を伝えた。
 - ① 対象者個人が特定される可能性のある情報は、収集する段階でマスキングまたは削除し、研究に使用しない。
 - ② 成果公表に関して、統計的に処理するかあるいは匿名の事例記述にとどめることを徹底し、対象者個人が特定されないか指導教員とともに慎重に確認する。
 - ③ 収集したデータは大学の規則に則り、管理・保管及び破棄する。
 - ④ 本研究への協力は任意であり、同意を行った後やインタビューを終了した後であっても、研究への参加を撤回することができる。また、撤回したことによる不利益は発生しない。
 - ⑤ 答えたくない、あるいは答えにくい質問については自由にスキップすることができる。
 - ⑥ 録音や録画はインタビューイヤーの了承を得られた場合のみ行う。
 - ⑦ 本研究の活用方法について、学内の限られた構成員の中での愛知県立大学「学生自主企画研究事業」に関わる研究発表会で報告する。また、インタビ

ュー協力事業所に研究成果報告書を提出する。

2-1. 分析結果①

若年女性はどのような困難を抱えており、どのように居場所につながるのか、居場所につながった後はどのような変化が生じるのかについて分析を行った。インタビューで得られたデータをコード化し、6つのカテゴリーに分類した。その結果を以下の表1にまとめた。

表 2 困難若年女性が心理的困難を抱えてからその困難を乗り越えるまでの状況の整理

| |
|--|
| <p>若年女性が抱える困難さ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生活レベルが低いことと倫理観の弱さが関係している ・ 同意がない行為などの性的虐待 ・ 過度な期待、愛されない、否定されるといった教育虐待 ・ 大人から怖い目や痛い目に遭う ・ 望まない妊娠、出産 ・ DV被害に遭った本人は、状況が自分で判断できていない、家に帰れない ・ DVから逃げてきた女の人たちは経済的困窮の状態にある ・ 精神疾患、病院のデイケアに行きづらい（男女関係なく同じ場所で過ごすためトラブルが起こる、楽しくない） ・ ヘルプマークを狙って声かける人たちもいる ・ 普段の生活もままならないくらい体調を崩している子が多い |
| <p>支援につながるうえでの困難</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の困りごと、悩み、困難が相談に値するかわからない ・ 大人から怖い目、嫌な目に遭った経験から大人を信用できない ・ 自分から支援を見つけたり、相談に行ける人が多かったりする年代ではなく、学校の友人などそういう関係性から切り離されていて、職場でも話せる人がいないことや、困難に耐えられない自分が悪いからだと思ってしまうことにより頼れない ・ 相談することへのハードルがある ・ 制度に繋がれない・窓口の存在を知らない ・ 地方のため自分でアクセスできない ・ 家出、性産業、犯罪、身分証明書を持っていないといった後ろめたい事情がある |
| <p>居場所を知るきっかけ</p> <p>①当事者から繋がる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ SNSで調べる |

| |
|--|
| <p>② 支援者側の働きかけ</p> <ul style="list-style-type: none">・ アウトリーチ・ ネットパトロール・ SNS 広告・ 通りすがり・ 掲示板・ 新聞記事 <p>③ 人伝い</p> <ul style="list-style-type: none">・ 友達・ 他機関（支援機関、クリニック、NPO） |
| <p>居場所の利用</p> <ul style="list-style-type: none">・ 相談支援、機会の提供（イベント、ワークショップ、勉強会）、物資の提供（食べ物、飲み物、Wi-Fi）が無料でなされる・ 人と気軽に会話がしたい・ アクセスしやすい場所にあることにより、ハードルが低い・ 別の予定の時間調整に便利・ 女性だけの場所が貴重・ 続けて相談したい・ 友人が欲しい・ 居心地がいい・ 孤独感軽減、自己肯定感増加・ 安心できる・ 頼れる人がいる |
| <p>SNS での相談</p> <ul style="list-style-type: none">・ まず話を聞いてほしい・ 一緒にぐちゃぐちゃな気持ちを整理してほしい・ 地方の子でも相談できる・ 妊娠の相談・ 漠然とした言葉で相談に来る |
| <p>心理的な困難を乗り越える</p> <ul style="list-style-type: none">・ コミュニケーションを通して空気が和んできたところで、身体のことにも目を向ける声かけを行う・ 安心できる人がいる場所であることが分かる・ 最初は居場所として使っているが、利用する中で他の人が相談しているのを見て相談してみようと思う・ 聞き取りを丁寧にしていくと深刻な状況が分かってきた |

- ・ 自分のことを人に話したり言語化したりできるようになる
- ・ 相談を通して問題の見方、心の持ちようが変わる
- ・ 困難さを抱えてはいけないという考えから解放される
- ・ 自分の人生の他の選択肢に気付く

2-2.分析結果②

表 3 と表 4 は、表 2 と同様にインタビューで得られたデータのコード化、カテゴリー化の結果をまとめたものである。

表 3 は、支援者が代弁する当事者のニーズをテーマにまとめた。コードを小カテゴリーにまとめ、それらを「他者から過ごし方を強制されずに、安心してやりたいことができる環境」「受容・共感・傾聴・理解してくれる支援者」「無料でもらえる物資や居場所のできる」の 3 つの大カテゴリーに分類した。

表 4 は、居場所が実際にどのような要素を持っているのか、居場所の実際というテーマでまとめた。表 3 で設定した大カテゴリーを基に、それらに対応するコードをまとめ、小カテゴリーに分類した。また、表 3 で設定した 3 つの大カテゴリーに加えて、「次の支援につながるような機会」という大カテゴリーを設定した。このカテゴリーは、当事者のニーズとしては導き出されなかったが、居場所が実際に持つ要素として導き出された。

表 3 支援者が代弁する当事者のニーズ

| 大カテゴリー | 小カテゴリー | コード |
|----------------------------------|--------------|---|
| 他者から過ごし方を強制されずに、安心してやりたいことができる環境 | 危険から守られる安全な場 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 匿名 ・ 非公開 |
| | 安心できる場 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 目が合わない空間 ・ 自分と同じような不安や境遇を抱えている子がいる安心感がある ・ 居心地良く過ごせる ・ 話せる安心感 ・ 穏やかな時間 ・ 怒られない時間 |
| | 入りやすさ | <ul style="list-style-type: none"> ・ かわいい空間 (バルーン、ピンク色、飾りつけ) ・ 温かみのあるハートウォーミングな空間 ・ カフェみたいな入りやすさ ・ 行政のようにハードルが高くない |

| | | |
|------------------------|---------------|---|
| | | <ul style="list-style-type: none"> ・自分の家に帰る前にちょっと寄れる |
| | 自由に過ごせる | <ul style="list-style-type: none"> ・一人で過ごせる ・友達を作らなくてもいい ・ダラダラできる、ぼーっとできる ・何もしなくていい ・勉強をしろと言われてない時間 ・無理にしゃべらなくていい ・静かに過ごせる ・寝られる場所 ・自由に過ごせる場所 ・友達をつくるのではなく、自分のことを知らない空間で自分らしくいる |
| 受容・共感・傾聴・理解してくれる支援者 | 安心して話を聞いてもらえる | <ul style="list-style-type: none"> ・信頼できる ・相談にのってもらえる（心理、健康、消費者金融のクーリングオフ、住居探し、生理痛、病院に行くべきかの助言） ・誰かと時々話せる ・じっくり話を聞いてもらえる ・話すことで、緊張から解放される |
| | 気持ちを分かってもらえる | <ul style="list-style-type: none"> ・困難を感じててもいいんだな、当然だよとわかってもらえる ・「変わりたい、今より良くなりたい」という気持ちを聞いてくれる ・言葉にできない不安を共有できる ・どうやって生きていこうかという不安をだせる |
| | 自分を尊重してもらえる | <ul style="list-style-type: none"> ・大事にしてもらえる ・自己肯定感が高まり自分のことを大事にできる |
| 無料でもらえる物資や居場所でできる娯楽がある | 必需品が無料でもらえる | <ul style="list-style-type: none"> ・手軽に食べられる食べ物 ・季節の必需品（リップなど） ・生活必需品（シャンプー、体を拭くウェットティッシュなど） ・Wi-Fi と充電器 ・生理用品 |
| | 娯楽がある | <ul style="list-style-type: none"> ・面白いマンガや本、時間をつぶせる |

| | | |
|--|--|-------------------|
| | | もの ・イベントに参加できる |
|--|--|-------------------|

表 4 居場所の実際

| 大カテゴリー | 小カテゴリー | コード |
|----------------------------------|---------------------|--|
| 他者から過ごし方を強制されずに、安心してやりたいことができる環境 | 利用者を守るための取り組み | <ul style="list-style-type: none"> ・11時から19時までと土日 ・週三日夜に実施 ・4h滞在可能 ・ICカードでだれがどのくらいいたか確認 ・身分証を確認 ・フルネームを聞かない ・団体の住所非公開 ・シェルターで中長期保護 ・携帯を預かることがある |
| | 居心地の良い空間づくり | <ul style="list-style-type: none"> ・ハンモック ・音楽を流す ・Wi-Fi |
| | 当事者の声を間接的に聞くための手段 | <ul style="list-style-type: none"> ・リクエストボックス ・意思表示カードの設置 |
| 受容・共感・傾聴・理解してくれる支援者 | 支援者の属性 | <ul style="list-style-type: none"> ・10代後半～30代 ・女性が多い ・カウンセラー ・広報担当 ・看護師、精神保健福祉士、社会福祉士、助産師、医者、保健室の先生 ・女性相談員 |
| | 否定せず受け入れ、一緒に考える関わり方 | <ul style="list-style-type: none"> ・双方で依存し、こちらが管理しない、向こうに依存されない ・決めつけの言葉を言わないようにする ・否定せず受け入れる ・解決できない問題でも一緒に考える ・解決しづらい問題は伴走して支援する |

| | | |
|--|-------------------------------|--|
| | | ・困難を抱えてはいけないという考え 方を変える |
| | 安心するような声 掛け・行動 | ・安心するような言葉をかける ・個別に声をかけて面接につなぐ ・ウェルカムカードを渡す ・相談内容は職員間で共有 ・女性スタッフが対応 |
| | 個人の問題ではなく、 社会の問題として 考える | ・支援者-被支援者の上下関係ではな く、対等で同じ社会に生きている ・個人の問題でなく社会の問題という 視点を持つ ・社会全体で見守れたらいいな ・居場所事業を増やしたい |
| | 支援者の考え方の 根本 | ・匙を投げるのではなく、何ができる か考える ・ジェンダー視点に立った支援をする |
| | 当事者の自立に向 けた思い | ・いい大人と出会ってほしい ・いてもいい場所があることが、当事 者の変化に重要 ・いろんな顔を持つことで成長する ・相談を早いうちにすることは大切なこ と ・今後の生活を見据えた支援をする |
| | 必需品の提供 | ・化粧品（シャンプー、パック）の提 供 ・コンドーム、生理用品の提供 ・カイロ ・体を拭くウェットティッシュ ・食事、お菓子、飲み物の提供 |
| | 居場所に気軽に来 てもらおうための動 機づけ | ・手仕事、クラフト ・マッサージ ・パワーストーンのブレスレット |
| | 娯楽やイベント | ・雑誌や本 ・おやつ作り ・ヨガ、お灸、筋トレ ・縄跳びなどの運動 |

| | | |
|----------------|-----------------|--|
| | | <ul style="list-style-type: none"> ・バトミントン ・工作 ・クリスマスイベント（ビンゴ大会） ・古民家でのワークショップ ・MV制作 |
| 次の支援につながるような機会 | 学びの機会の提供 | <ul style="list-style-type: none"> ・栄養指導講座 ・英会話 ・お話し会 ・自立支援、就労支援 ・自己尊重トレーニング、アサーティブトレーニング ・選択肢の提供 ・困難を解決するため他機関につながるための支援 ・性感染症の検査、コンドームのレクチャー |
| | 外部の機関や関係者とのつながり | <ul style="list-style-type: none"> ・企業からの寄付 ・ボランティアからの支援 ・女医 ・フェムシップドクター制度 |

Ⅲ. 考察および結論

インタビュー調査の結果を分析し、困難若年女性が居場所につながるまでの動向及び居場所の要件の2点を導き出した。以下、これらについて述べる。

1. 困難若年女性が居場所につながるまでの過程

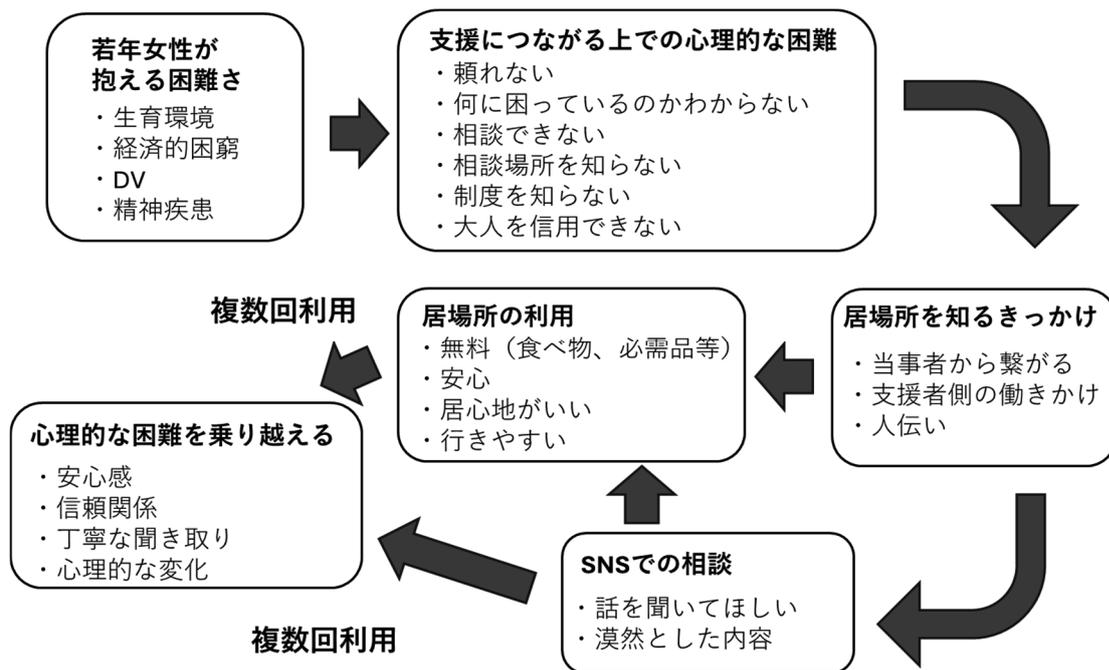


図 1 困難若年女性が居場所につながるまでのプロセス

彼女たちには多様かつ複雑な問題が背景にある。幼少期からの虐待や生活レベルが低いことなど、生育環境が適切なものではないことが分かった。経済的な困窮状態であることや、DVを受けている・DVから逃げてきたという緊迫性があったり、さらには精神疾患と戦っていたりするといった問題がある。根本には生活レベルの低さと倫理観の弱さが原因として挙げられる。例えば被害に遭っていても、状況の判断ができず問題を問題と判断できないが故に渦中から距離を置くという判断ができない。一つの問題が本人をパワーレスにさせているのではなく、複数の要素が発生しており一元的な対策では太刀打ちできないことがうかがえる。

相談という支援につながるまでもにも困難さが付きまとう。自分の抱えているものが相談に値するほどなのか思いとどまったり、相談するにはハードルが高いと尻込みするような気持ちがあったりする。今までの経験で大人から嫌なことをされたことによる信頼感の欠如や、そもそも制度につながるという考えが湧かない・存在を知らないという問題が生じており、支援への障壁となっている。

そのような状況下に置かれた若年女性でも、中にはSNSを利用するうちに居場所支援を行う団体のことを知ったり、友達や支援機関、クリニック、NPOなどからの情報提供から存在を知ったりすることなどがある。しかし、悩みを抱えている若年女性は、先に述べたように潜在化しているため、その層にアプローチするために、支援者側は様々な工夫を考え、策を講じている。支援者側からの働きかけとして、街頭でのアウトリーチ活動のように実際に声をかけたりする活

動やネットパトロール、SNS 広告、ネット掲示板のように、SNS を活用する方法、新聞記事や通りすがりといった目に触れてもらうことを目的として動く形がある。

もし、彼女たちが支援者の話に心動かされ勇気を踏み出すことができれば、支援に一步近づくことにもなる。

実際に彼女たちが居場所に訪れ、利用をしてみたいと思うきっかけは様々であることが分かった。相談したい、人と気軽に話したいというニーズが満たされる場所であること。イベントやワークショップのような物珍しさに惹かれる、食べ物や飲み物、WI-FI が無料であることやアクセスしやすい、次の予定との時間調整に訪れることのできるといった気軽さがあること。居心地がよく、頼れる人がいるという安心感のある場所といったことである。さらに女性だけの場と限定する団体もあり、その貴重さを重宝する利用者も過去にいたと語る支援者もいた。

また、対面での相談に限らず SNS での相談を受けることで、話すことへのハードルを下げる効果があると考えられる。実際、自身の気持ちに整理がついておらず、漠然とした状況を一緒にどうかしてほしい、受け止めてほしいという思いで利用する女性たちも多くいる。そして、支援団体は交通の便が良く人も集まる都市部に多く設置されていることが多いが、SNS でなら地方からでも相談が可能である。

数回の利用では、根本的な問題の解決どころか、実態の把握にもたどり着けないため、やはり複数回利用がマストになってくる。初期の利用を通して、その居場所・支援者たちが本当に安心できる存在か、信頼しても大丈夫と利用者が思えるかが潜在的なニーズを掘り起こすための鍵となる。そのために、支援者側は丁寧な聞き取りや否定を決してせず、受け止めることから、真摯な姿勢を見せ、信頼関係の構築に励むことが重要である。その努力が利用者の心の変化をもたらし、具体的な支援を考え、一人ひとりに適した解決策を提案することができる。

2.居場所の要件

今回の研究から、困難若年女性の居場所には大きく 4 つの要素が抽出できた。

(1)物理的な場

身を置く環境として、安心できる場を提供する必要がある。そのためには、プライバシーの保護や匿名での利用といった取り組みが重要である。それらの工夫から自身の安全が確保されているという安心感につながる。

(2)支援者

居場所の利用をするときに、支援者は利用者に対して信頼できる存在であることが大きな意味を持つ。丁寧な聞き取りのような適切なアプローチを行い、か

つ話を否定せず聞く態度を持ちコミュニケーションを取る姿勢を持つ支援者が必要である。

(3)物資

食べるものや必需品が無料で提供されるほかに、娯楽品や嗜好品があることが必要であることが分かった。

(4)次の支援につながるような機会

様々な知識を得る機会や、季節のイベント・行事といった経験ができる機会の提供に加えて、制度や他機関とつながる機会の提供が必要である。

以上のように、様々な問題や困難を抱える若年女性への心のケアをするための安全な居場所には、まず落ち着ける空間が必要である。そして、利用する女性たちが必要としている生活に欠かせないものや嗜好品が無料で提供され、居場所のできるような娯楽やイベントが必要である。かつ、居場所に支援者がいることが大切である。支援者とは女性であり、いるだけで無理に介入しないという人である。当事者が居場所で何かに強制されることなく自由に過ごし、相談したいときに相談できるという支援者の関わり方が当事者の「また行ってみよう」という気持ちにつながっていると考えられる。

おわりに

本研究は、物理的な居場所がなく、様々な問題や困難を抱える若年女性への心のケアをするための安全な居場所に求められる要件を明らかにすることを目的として行った。インタビュー調査から、困難若年女性の居場所に対するニーズと居場所の要件を明らかにすることに加え、困難若年女性の抱えている複合的な困難さ、若年女性が困難を抱えてから居場所支援につながるまでのプロセスについて明らかにすることができた。

困難若年女性が居場所支援につながるまでのプロセスでは、困難若年女性は、自らが抱える多様で複合的な困難に加え、相談に対する困難を抱えており、困難さをさらに深刻化させていることが分かった。そして、相談に対する困難さは、彼女たちの困難さを潜在化させている要因でもある。そのため、困難若年女性を居場所支援につなげるためには、支援者側から当事者に働きかけていくことが重要であることが示唆された。

居場所の要件について、支援者の代弁する当事者のニーズと、実際に居場所で行われている取り組みに分けて分析を行った。当事者のニーズには、場、支援者、物資に関するニーズが抽出できた。居場所での実際の取り組みでは、当事者が抱える3つのニーズを満たす取り組みに加え、機会を含めた4つの要素が抽出できた。先に述べたように、困難若年女性の支援において、居場所の複数回利用が

必要になる。そのため、当事者がまた来ようと思えるような環境と体制を整えることが求められる。

私たちがこの研究を始めたきっかけは、トー横やグリ下に集まる女性自身が望む支援を受けられているのだろうかという疑問に思ったことであつた。本研究を通して、私たちは、支援につながりにくく、受けたい支援が受けられていない女性たちが、なぜ専門家のいる居場所につながれないかを知ることができた。また、支援につなげる工夫の必要性、居場所に求められる場・支援者・物資・機会の要素を明らかにすることができた。困難若年女性の存在は潜在化しやすい上に先入観を持たれやすいことも明らかにできた。私たちは困難若年女性たちの実態を広く知ってもらいたいとの思いから、この研究成果をもとにポスターを作成した。今後も学び続け、女性たちの困難さをまだ知らない人に現状を伝えたいと思う。

謝辞

本研究を遂行するにあたり、多くの方々にご協力を賜りました。教育福祉学部の宇都宮みのり先生には、本企画の発案から熱心にアドバイスいただき、研究の実施にあたり適切にご指導を賜りました。心より感謝申し上げます。

また、インタビュー調査にご協力くださった皆様には、若年女性の抱える困難さや、居場所で行っている支援や工夫、女性支援に対する考えなど、貴重なお話をいただきました。深く感謝申し上げます。

本研究の制作に尽力して下さったすべての皆様に心より御礼申し上げます。

引用参考文献

- ・ 一般社団法人若草プロジェクト・特定非営利活動法人日本 NPO センター「生きづらさを抱える女性の支援にかかわる団体の活動実態調査 報告書 2022 年度」.
- ・ 上間陽子(2022)「居場所がない若年女性のためにできること」『第三文明』(747),28-30.
- ・ 大谷恭子(2022)「求められる居場所:困難を抱えた少女・若年女性たちの今」『心と社会/日本精神衛生会 編』53(2),36-41.
- ・ 北川美里(2023)「少女が生きづらさを感じない社会をつくるために必要なこと:若年女性の居場所「わかくさりビング」の活動を通して」『龍谷大学大学院法学研究』25,1-15.
- ・ 警察庁「子供の性被害」.
- ・ 警察庁「令和6年におけるストーカー事案、配偶者からの暴力事案等、児童虐待事案等への対応状況について」.

- ・ 厚生労働省「いわゆるアダルトビデオ出演強要問題・「JK ビジネス」問題等に関する関係府省対策会議決定」。
<https://www.mhlw.go.jp/content/001232766.pdf>
- ・ 厚生労働省「いわゆるアダルトビデオ出演強要問題・「JK ビジネス」問題等に関する今後の対策」（平成 29 年 5 月 19 日）。
<https://www.mhlw.go.jp/content/000778882.pdf>
- ・ 厚生労働省「こども政策の新たな推進体制に関する基本方針～こどもまんなか社会を目指すこども家庭庁の設立～」(令和 3 年 12 月 21 日閣議決定)。
- ・ 厚生労働省「こどもの居場所づくりに関する指針」(令和 5 年 12 月 12 日閣議決定)。
- ・ 厚生労働省「困難な問題を抱える若年女性に対する支援スタートアップマニュアル」。
- ・ 厚生労働省「困難な問題を抱える女性への支援」。
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/index_00023.html
- ・ 厚生労働省「困難な問題を抱える女性への支援に関する法律（女性支援新法）(令和 6 年 4 月 1 日施行)。
- ・ 厚生労働省「令和 5 年度福祉行政報告例（児童福祉関係の一部）概況」。
- ・ 厚生労働省自殺対策推進室・警察庁生活安全局「令和 6 年中における自殺の状況」。
- ・ 厚生労働省社会・援護局地域福祉課女性支援室 2025「困難な問題を抱える女性への支援について」。
- ・ こども家庭庁「こどもの居場所づくりに関する調査研究」。
<https://www.cfa.go.jp/policies/ibasho>
- ・ こども家庭庁「こどもの貧困対策・ひとり親家庭支援の現状について」。
- ・ 橘ジュン(2020)「生きづらさを抱えた若年女性のための居場所づくりを」『第三文明』(730),23-25.
- ・ 男女共同参画局(2025)「令和 7 年度『若年層の性暴力被害予防月間』実施要綱」(令和 7 年 2 月 12 日)。
- ・ 藤原望(2024)「住まいの貧困を考える(5)困難を抱えた若年女性への支援と住まい:都会の民間シェルターの活動から」『福祉のひろば/総合社会福祉研究所 編』292,44-47.
- ・ プラン・インターナショナル・ジャパン(2024)「女の子と若年女性に

としての居場所:「わたカフェ」の現場での気づきから」.

- 文部科学省「令和6年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」.
- 山尾貴則(2025)「若者自立支援活動における居場所の意味:参加者の語りから考える」『社会学・社会福祉学研究』4,1-13.

学生自主企画研究・活動 成果レポート

| | |
|-------------|--|
| 研究課題 | 大学生の抱える睡眠課題の改善に向けた ガイドラインの作成 |
| 研究代表者 | 情報科学部 情報科学科 氏名 中山怜士 |
| グループ 構成員 | 情報科学部 情報科学科 野村光 情報科学部 情報科学科 若山智彰 大学院 情報科学研究科 我妻信実 大学院 情報科学研究科 大橋玲音 大学院 情報科学研究科 鈴木丈慈 大学院 看護学研究科 小久江圭人 大学院 看護学研究科 田口陽菜 大学院 看護学研究科 正村友梨奈 アドバイザー 看護学部 横山加奈 先生 |

目次

| | |
|--------------------------|----|
| 1. はじめに..... | 49 |
| 1.1 研究背景と目的..... | 49 |
| 1.2 研究への取り組み..... | 50 |
| 2. 睡眠啓発コンテンツの媒体の検討..... | 51 |
| 2.1 アンケート項目..... | 51 |
| 2.2 アンケートの実施方法..... | 51 |
| 2.3 アンケートの結果と考察..... | 52 |
| 3 睡眠啓発コンテンツの作成と評価..... | 55 |
| 3.1 睡眠啓発コンテンツの作成..... | 55 |
| 3.2 評価アンケートの項目と実施方法..... | 55 |
| 3.3 アンケートの結果と考察..... | 55 |
| 4 まとめ..... | 57 |

| | |
|-----------|----|
| 参考文献..... | 58 |
| 謝辞..... | 59 |
| 業績..... | 60 |

1. はじめに

1.1 研究背景と目的

若年期のメンタルヘルスは、その後の人生に大きな影響を与え、犯罪や自殺とも関連している[1]。日本では若者の自己効力感が低いことが指摘されており[2]、20代の死因の第一位が自殺であるため、若者のメンタルヘルスに対する関心が高まっている。また、大学生の約20%が抑うつ傾向を示しているとの報告があり[3]、この世代は精神疾患の好発年齢であるため、手厚いサポートが求められる。

メンタルヘルスには、睡眠、運動、食事、電子機器の使用時間、個々のクロノタイプ（朝型・夜型）などが影響を与えることが知られており[4-6]、これらの要因は生活リズムに大きく左右される。特に大学生においては、高校生とは異なる生活環境や生活パターンが存在し、通学時間がその生活リズムやメンタルヘルスに与える影響については十分に研究されていないのが現状である。

これまで我々の研究グループでは、愛知県立大学の学生を対象に、通学時間と睡眠時間、メンタルヘルスとの関連をアンケート調査した[7]。調査の結果、愛知県立大学の学生の8割以上が自宅から通学しており、自宅から通う学生の約7割が片道1時間以上通学に要していることを明らかにした。通学に片道90分以上かけて通う学生も少なくなく、このような学生は生活の多くの時間を通学に要しているといえる。また、通学時間が長くなるほど睡眠不足だと感じる人が多くなることも明らかにした。つまり、通学時間は睡眠不足感に影響を与えており、講義等にも少なからず影響を与えているといえる。さらに、通学時間とうつ尺度（PHQ-9 [8]）との関係を調査した結果、通学時間は睡眠時間を媒介変数としてメンタル（うつ尺度）に影響を与えることを明らかにした。通学時間が長くなるほど睡眠時間が短くなり、睡眠時間が短くなるほどうつ尺度の値が大きくなる。更に、学生のうち約20%が、夜型のクロノタイプを持っており、夜型の学生は生活習慣が乱れやすいことも明らかになった。特に朝食の摂取と睡眠時間で朝型の学生とは大きな差があった。

愛知県立大学の学生の多くは通学時間が長く、それによって睡眠不足に感じている。通学時間を短くすることは容易ではないが、睡眠不足に感じやすいという睡眠課題は克服する必要がある。また、クロノタイプは生まれつきであり変えることはできないが、自分は夜に眠くならないタイプであることを認識し、社会生活に適応できるように眠る努力をしたり、自分のリズムに合った生活を選択したりすることには意義がある。

このような愛知県立大学の学生に特有の睡眠課題を踏まえて、睡眠課題を解

決するための取り組みが求められる。なぜならば、睡眠課題が学業やメンタルにも悪影響を与える可能性があるためである。そこで本研究では、愛知県立大学の学生向けの睡眠啓発コンテンツを作成することを目的とする。まず睡眠啓発コンテンツに適した媒体について調査し（2章）、調査結果に基づいて実際にコンテンツを作成して評価を行った（3章）。

1.2 研究への取り組み

本研究の取り組み過程を表1に示す。本研究は情報科学部・研究科と看護学部・研究科の学生の共同研究である。そのためそれぞれメインのキャンパスが異なることから、基本的にはMicrosoft Teamsを用いてオンラインで会議やミーティングを行った。

表1 本研究のスケジュール

| 研究期間 | 研究内容 |
|---------|---|
| 4月 | 研究課題の検討，先行研究の調査，研究費の使途の検討 |
| 4月28日 | 第1回全体会議（提案内容の確認） |
| 5月 | 計画書の作成，公開プレゼンの準備 |
| 5月21日 | 公開プレゼン |
| 6月 | 購入物品の選定，先行研究の調査 |
| 6月16日 | 第2回全体会議（今後の活動のタスク確認，割り振り） |
| 7-9月 | 先行研究の調査，睡眠啓発コンテンツの媒体の検討，睡眠啓発コンテンツの構成の検討 |
| 9月30日 | 第3回全体会議（進捗の確認） |
| 10月 | 大学祭に向けた準備 |
| 10月22日 | 中間報告会にて成果報告 |
| 10月31日 | 日本公衆衛生学会にて研究成果を発表 |
| 11月 | 睡眠啓発コンテンツの作成 |
| 11月1,2日 | 県大祭にて研究成果の展示 |
| 12月 | 睡眠啓発コンテンツの評価 |
| 1月 | 最終報告会の準備，成果レポートの作成 |
| 1月22日 | 最終報告会にて成果報告 |

2. 睡眠啓発コンテンツの媒体の検討

本章では、睡眠啓発コンテンツに適した媒体を検討するため、アンケート調査した結果について述べる。

2.1 アンケート項目

アンケートでは、「睡眠改善に適したメディア」について尋ねるとともに、回答者が「睡眠に関して課題を感じているか」も回答してもらった。

2.2 アンケートの実施方法

アンケートは、愛知県立大学の大学祭である「県大祭」において実施した。実施日は、2025年11月1日と11月2日の2日間である。県大祭の企画の一部としてブースを設け、睡眠に関するポスターや動画コンテンツの展示を行った。その一環として、来場者に対して、「睡眠に関して課題を感じていますか？」と「睡眠改善に適したメディアは？」という2つのアンケートに回答してもらった。気軽に回答できるように、図1, 2に示すアンケート用紙を用意し、一人につき一つのシールを貼ってもらうことで回答してもらった。シールは回答者の年代によって色分けし、高校生以下、大学生、大人でそれぞれ緑、青、赤とした。

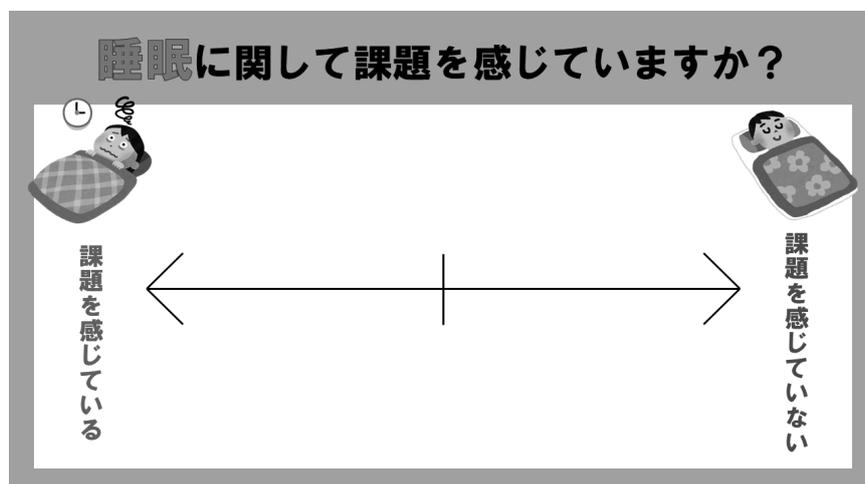


図 1 「睡眠に関して課題を感じているか？」におけるアンケート用紙

睡眠改善に適したメディアは？ 

| Webページ | short動画 | long動画 | 紙のリーフレット |
|------------------|---------------|--------|----------|
| | | | |
| ChatGPTのような対話型AI | 身体のある対話エージェント | SNS | ラジオ |
| | | | |

図 2 「睡眠改善に適したメディアは？」におけるアンケート用紙

2.3 アンケートの結果と考察

県大祭にて来場者にシールを貼付してもらったアンケート用紙をそれぞれ図 3 および図 4 に示す。図 3 より、「睡眠に関して課題を感じているか？」という質問に対して、多くの回答者が課題を感じている側にシールを貼付しており、全体として睡眠に対する課題意識が高い傾向にあることが確認された。

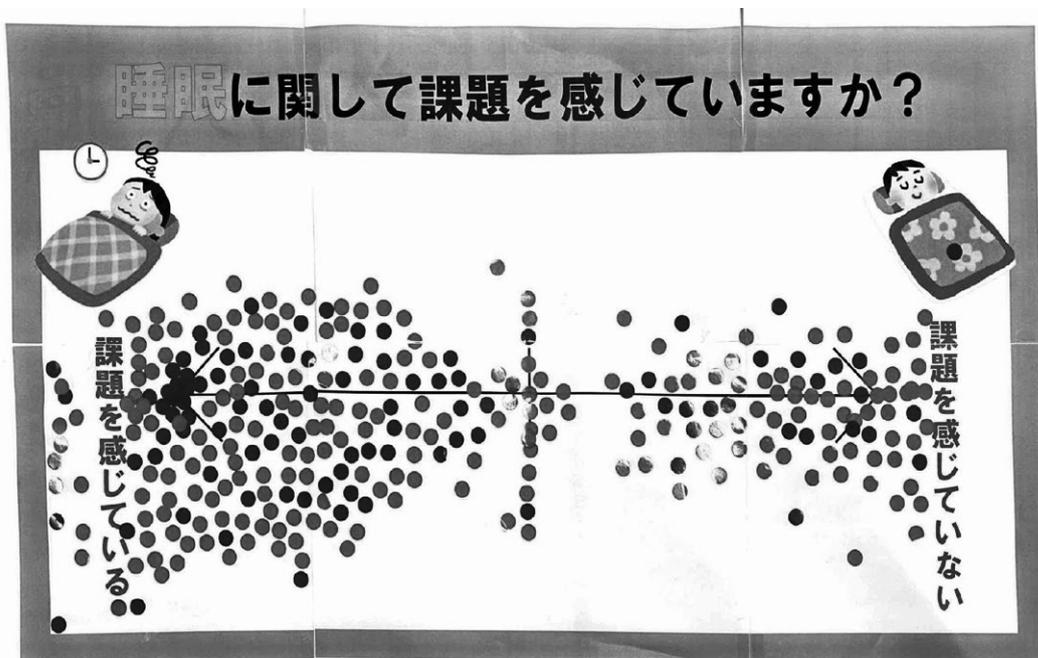


図 3 「睡眠に関して課題を感じているか？」

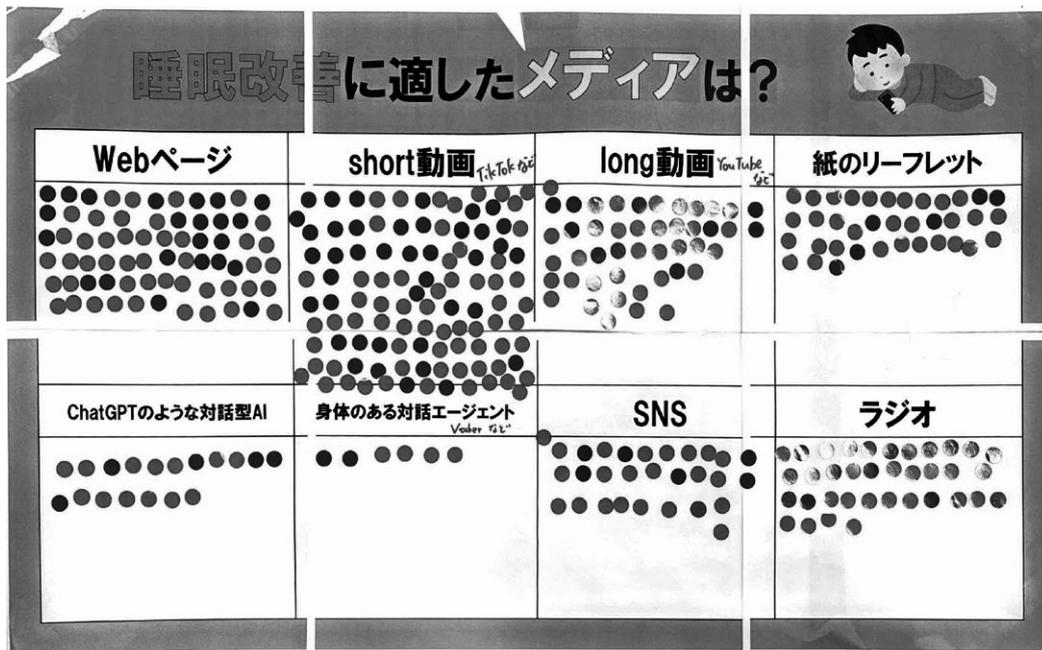


図4 「睡眠改善に適したメディアは？」シール貼付後の結果

次に、「睡眠改善に適したメディアは？」に関する集計結果を図5および図6に示す。これらは図4のシール貼付後の結果を人手により集計したものである。図5より、全体ではshort動画が31%と最も高い割合を占めており、WebページやSNSといった他のデジタルメディアと比較しても支持されていることが分かる。さらに、図6に示す大学生に限定した集計結果では、short動画が38%と全体結果よりも高い割合を示しており、大学生においてshort動画形式の情報提供が特に有効である可能性が示唆される。一方で、大人の参加者においては紙のリーフレットを選択する傾向も見られ、年代によって適したメディアが異なる可能性が考えられる。

以上の結果から、本研究では次章において、睡眠啓発コンテンツとしてshort動画を作成し、その有効性について検討する。

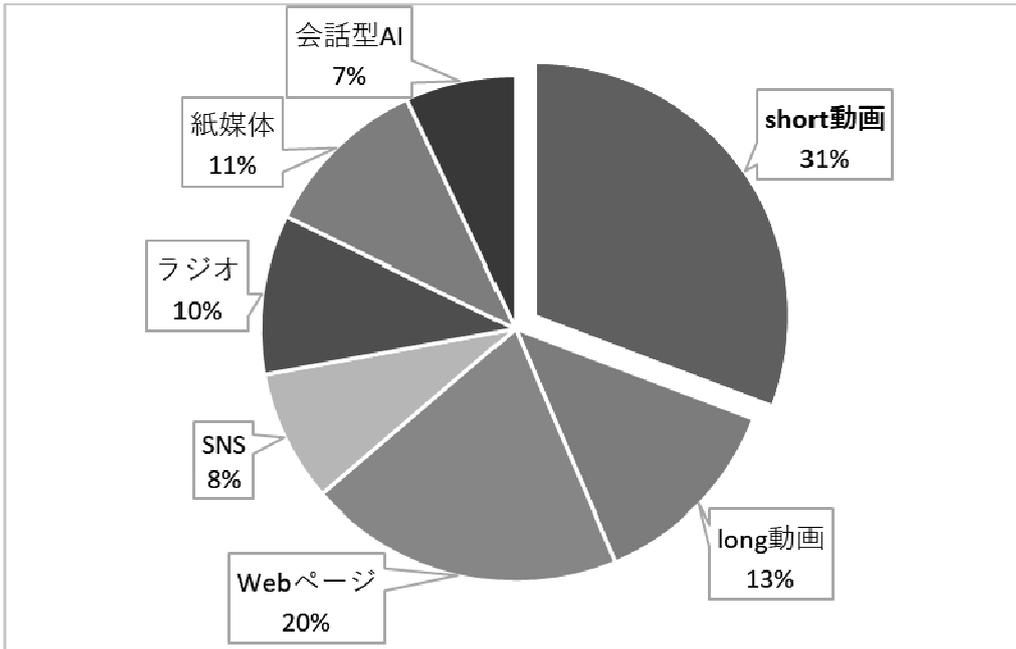


図 5 「睡眠改善に適したメディアは？」全体の集計結果

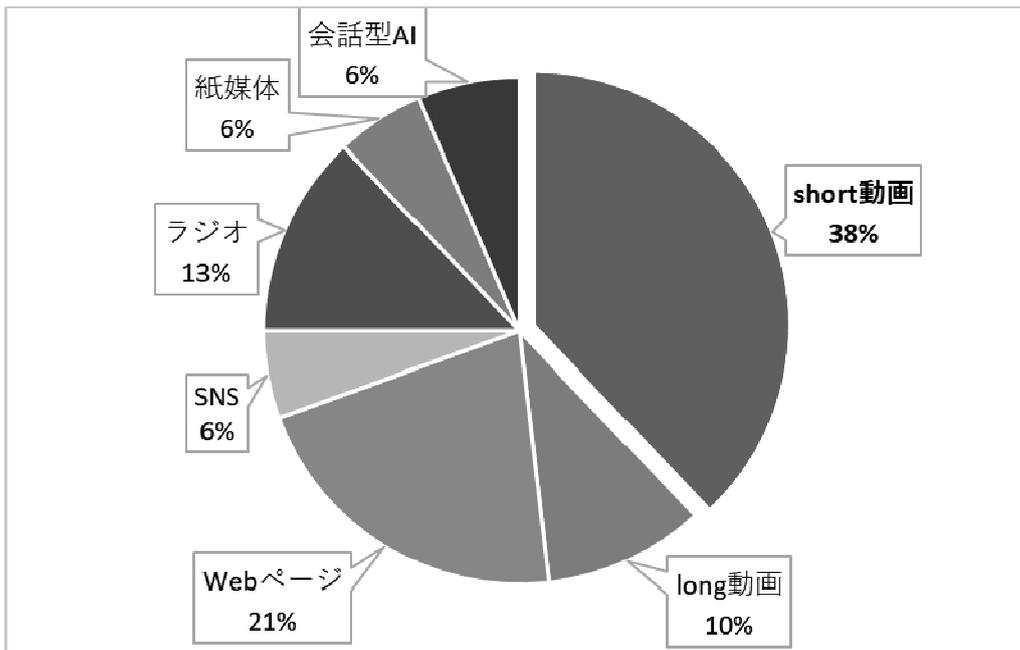


図 6 「睡眠改善に適したメディアは？」大学生に限定した集計結果

3 睡眠啓発コンテンツの作成と評価

3.1 睡眠啓発コンテンツの作成

前章の分析結果を踏まえて、睡眠啓発コンテンツとして short 動画形式で動画コンテンツを作成する。大学生に親しみやすいよう、2D アバターの利用や SNS を意識したコンテンツを目指す。

具体的には、看護学研究科のグループ構成員が動画の絵コンテを作成し、音声合成器により台本の文章の読み上げ音声を作成した。この音声をスライドショーと結合し、ショートプレゼンテーション形式の動画を作成した。

3.2 評価アンケートの項目と実施方法

作成した睡眠啓発動画の有効性を評価するため、愛知県立大学の学生を対象に印象評価アンケートを実施した。調査は、対象者に動画を一度視聴してもらった後、Microsoft Forms を用いて回答を収集した。アンケート項目は動画内容の理解度および睡眠に対する意識変化を測定することを目的として設定し、「動画の情報量の適切さ」「睡眠の現状を理解できたか」「睡眠の重要性を理解できたか」「動画を見てもっと睡眠を大切にしようと感じたか」の4項目とした。各項目について、「とてもそう思う」「そう思う」「どちらでもない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5段階尺度で回答を求めた。加えて、動画に対する感想や改善点、期待する内容などを自由に記述できる欄を設け定性的な意見の収集も行った。回答者数は34名であった。

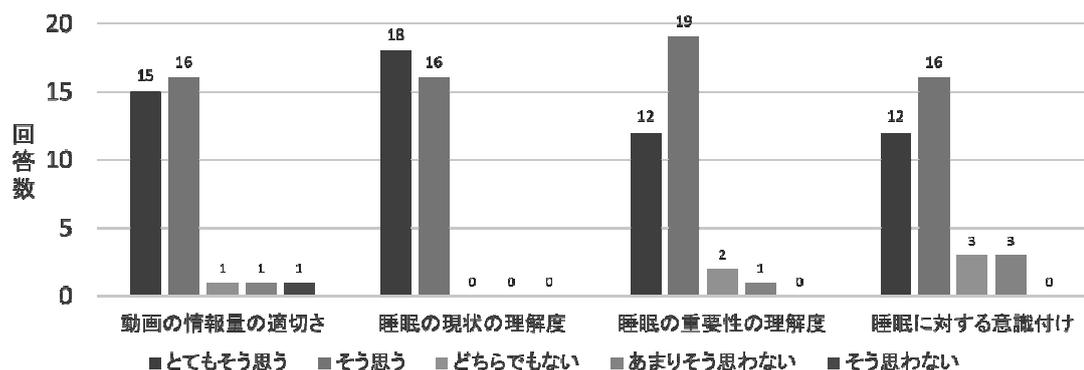


図7 動画視聴アンケートの結果

3.3 アンケートの結果と考察

アンケートの集計結果は、図7の通りである。集計の結果、4つの評価項目すべてにおいて、大多数の回答者から肯定的な評価が得られた。「動画の情報量の

適切さ」については、34名中31名（約91.2%）が「とてもそう思う」または「そう思う」と回答しており、情報量が適切であったと評価されたことがわかる。「睡眠の現状の理解度」については、34名全員（100%）が「とてもそう思う」または「そう思う」と回答し、動画の主題が明確に伝わったことを示している。同様に、「睡眠の重要性の理解度」では31名（約91.2%）、「動画を見て、もっと睡眠を大切にしようと感じたか」という意識変容に関する項目でも28名（約82.4%）が肯定的な回答をしており、本動画が啓発コンテンツとして有効に機能したことが示唆される。

自由記述では、肯定的な意見と今後の改善に向けた意見の両方が得られた。肯定的な意見としては、「端的にまとまっていてわかりやすかった」「動画が短くて、見てみようかなという気になった」といった、内容の簡潔さや視聴しやすい長さを評価する声が寄せられた。また、「県大生ならではの睡眠不足の状況が明らかになり、とてもわかりやすい」というコメントもあり、身近なデータを扱ったことが共感と理解を促進したと考えられる。

一方で、改善点に関する指摘も複数見られた。最も多く挙げられたのは、情報量と動画のテンポに関する意見である。「スライド・グラフの情報量が多いのに喋る速度や画面遷移が早くて、1回で理解しきれなかった」という指摘があったように、一部の視聴者にとっては情報過多に感じられたことがうかがえる。この点については、「アニメーションを加えるかスライドを増やすことで視線誘導するといいかもしれない」といった具体的な改善案も寄せられた。

また、内容の深化を求める声も少なくなかった。「睡眠時間が少ないとどのようなリスクがあるのかをもっと伝えられると、睡眠を大切にしようと思える」「現状を説明するだけにとどまらず、効果的な睡眠の取り方など具体的な解決方法についても知りたい」といった意見から、現状理解の先にある行動変容を促すための、より具体的で専門的な情報へのニーズが明らかになった。その他、技術的な点として「合成音声の発音が若干聞き取りづらい」という音声に関するフィードバックもあった。

以上の結果から、作成した動画は、短い時間で大学生の睡眠問題への関心を喚起するという点で、啓発コンテンツとして一定の成果を上げたと考えられる。しかし、すべての視聴者に一度で内容を完全に理解してもらうためには、情報提示の速度や視覚的表現に改善の余地がある。

同時に、今回の研究結果をまとめたリーフレットも作成し、学生に配布することも予定している。

4 まとめ

本研究では、愛知県立大学の学生に向けた睡眠啓発コンテンツの作成を行った。まず睡眠啓発コンテンツに適した媒体を調査した、調査結果から **short** 動画が好ましいと判断したため、**short** 動画形式でコンテンツを作成した。大学生に作成した動画を視聴してもらい、印象評価アンケートを実施した結果、情報量や理解度の観点から高い評価を得たことから、本研究で作成した動画コンテンツの有用性が示された。今後は、アンケートのフィードバックをもとに、グラフの表示時間を調整したり、アニメーションを活用したりするなどの工夫を重ねたい。さらに、睡眠不足がもたらす具体的な健康被害や、すぐに実践できる対策といった、視聴者の行動変容に直接結びつく情報を加えることで、コンテンツの質を高めていく予定である。さらに改善した動画・リーフレットを愛知県立大学の学生に周知する予定である。

参考文献

- [1] World Health Organization. World Mental Health Report: Transforming Mental Health for all, 2022.
- [2] 内閣府. 令和元年版 子供・若者白書, 2019.
- [3] 高柳茂美, 杉山芳雄ほか. 大学生のメンタルヘルスの実態とその関連要因に関する疫学研究, 厚生指標(0452-6104), 64 巻 2 号, pp.14-22, 2017.
- [4] Daniel K. Hosker, R. Meredith Elkins, Mona P. Potter. Promoting Mental Health and Wellness in Youth Through Physical Activity, Nutrition, and Sleep, Child and Adolescent Psychiatric Clinics of North America, Vol.28, Issue 2, pp.171-193, 2019.
- [5] 亀岡聖朗, 林かおり, 齊藤敦子. 大学生の学生生活の実態と心身の健康に関する学科・学年別特徴の検討, 桐生大学紀要(2186-4748), 第 22 号, pp.65-75, 2011.
- [6] Efrosini A. Papaconstantinou, Heather Shearer, Nancy Fynn-Sackey et al. The Association Between Chronotype and Mental Health Problems in a University Population: a Systematic Review of the Literature, International Journal of Mental Health and Addiction, Vol.17, pp.716-730, 2019.
- [7] 我妻信実. 令和 6 年度学生自主企画研究事業報告書, pp.37-53. 2025.
- [8] Muramatsu K, Miyaoka H, Kamijima K et al., Performance of the Japanese version of the Patient Health Questionnaire-9 (J-PHQ-9) for depression in primary General Hospital Psychiatry. 52: 64-69, 2018.

謝辞

本研究を遂行するにあたり，多くの方々にご指導ご鞭撻を賜りました。

看護学部 横山加奈先生には，本企画の発案から熱心にアドバイスいただき，研究の実施にあたり適切なご指導を賜りました。深く感謝申し上げます。

愛知県立大学学長 川畑博昭先生，教育支援センター長 菊池好行先生をはじめ，本研究を審査頂きました先生方，聴講者の皆様には，中間報告会，最終報告会にて，適切なご助言を賜りました。感謝申し上げます。

本研究の遂行にあたり，アンケートに参加頂いた皆様に，感謝いたします。

業績

[1] 我妻 信実, 坪倉 和哉, 中山 怜士, 金田 修香, 中村 莉子, 檜物 春佳, 横山 加奈: 自宅通学者が多い大学における通学時間と睡眠時間, 精神的健康との関連, 第 84 回日本公衆衛生学会総会, PB-04-14, Oct. 2025.

学生自主企画研究・活動 成果レポート

| | |
|-------------|---|
| 研究課題 | <p style="text-align: center;">持続可能な観光の展望</p> <p style="text-align: center;">—犬山市におけるフィールドワークを通して—</p> |
| 研究代表者 | 外国語学部 国際関係学科 氏名 山門悠楽 |
| グループ 構成員 | <p>正規構成員</p> <p>国際関係学科 3年 川口芽生</p> <p>国際関係学科 3年 鈴木梨華</p> <p>国際関係学科 3年 内藤舞</p> <p>国際関係学科 3年 永谷ななみ</p> <p>国際関係学科 3年 安井玲香</p> <p>国際関係学科 3年 山田陶子</p> <p>協力者</p> <p>国際関係学科 3年 青井咲樹</p> <p>国際関係学科 3年 佐野愛子</p> <p>国際関係学科 3年 中洲由登</p> <p>国際関係学科 3年 永田涼</p> <p>国際関係学科 3年 松原愛花瑠</p> |

目次

1. はじめに
 - 1-1. 研究目的
 - 1-2. 研究背景
 - 1-3. 研究概要
 - 1-4. 調査方法

2. 結果 I 観光客受け入れ側へのインタビュー調査
 - 2-1. インタビューの調査方法
 - 2-2. 調査結果
 - 2-3. 結果 I のまとめ

3. 結果 II 観光客への質問紙調査
 - 3-1. 質問紙の調査方法
 - 3-2. 調査結果と分析
 - 3-3. 結果 II のまとめ

4. 考察
 - 4-1. 現状
 - 4-2. 観光活発化の利益と課題
 - 4-3. 持続可能な観光の展望
 - 4-4. 今後の研究課題

謝辞

参考文献

付録

1. はじめに

1-1. 研究目的

本研究は日本での観光との向き合い方について検討することを目的としている。近年、日本において観光の促進が重要視されるようになり、急速な観光地化が進んでいる。このことから本研究では、大都市以外の地域の観光客の増加に焦点を当てる目的で、愛知県犬山市を例に観光の活発化における影響を考察する。

1-2. 研究背景

2023年12月から2024年1月の一か月にかけて、外国人観光客の滞在が全国で最も増加した街として犬山市が紹介されている（東海テレビ, 2024）。この例から、大都市でない地域における観光の現状に着目することは、観光による地域の活性化と問題点およびその解決策を考える上で重要になるだろうと考えられる。

1-3. 研究概要

今回は愛知県犬山市を対象に現地調査を行い、観光地の現状と、観光客が大都市以外の地域を目的地として選ぶ根拠を明らかにする。具体的には、国内外からの観光客が旅行を決定する際に求めているものや、観光の活発化が地域にもたらす利益、また観光の活発化に伴う問題点に特に焦点を当て、今後の持続可能な観光の在り方について展望を述べる。

犬山には文化の体験機会や歴史遺産、自然道など、訪日観光客の興味を惹くような要素が複数ある。犬山のもつこれらの要素を利用した観光振興策について調査する。また、多言語対応や SNS による宣伝効果が観光を活発化すると考えられる。これを明らかにするために観光客の実際の行動について調査する。

1-4. 調査方法

6月から7月にかけて、文献調査と、名古屋経済大学におけるインタビュー調査を行った。8月に犬山城下町におけるフィールドワーク（写真1～5参照）と、堀部邸、Inside Japan Toursにおけるインタビュー調査を行った。10月から12月にかけて、調査結果の分析・考察と、犬山城下町における観光客を対象とした質問紙調査、加えて犬山市観光協会、犬山市市役所におけるインタビュー調査を行った。1月には調査結果の分析・考察を行った（インタビュー調査の詳細は本論第2章、質問紙調査の詳細は本論第3章参照）。



写真1 本町通りの案内板（2025年8月11日、犬山城下町にて筆者撮影）



写真2 大本町の案内板（2025年8月11日、犬山城下町にて筆者撮影）



写真3 犬山城入口付近（2025年8月11日、犬山城下町にて筆者撮影）



写真4 旧堀部家住宅の案内板（2025年8月11日、犬山城下町にて筆者撮影）



写真5 犬山駅西口の案内板（2025年8月11日、犬山城下町にて筆者撮影）

2. 結果 I 観光客受け入れ側へのインタビュー調査

2-1. インタビューの調査方法

2025年6月から12月にかけて、研究者、営利機関、非営利団体、公的機関といった異なる立場の人々から情報を得ることを目的としてインタビュー調査を行った。調査対象者は以下の通りである。

(1) 名古屋経済大学（2025年6月19日）

申請時に先行研究として扱った二つの論文（「意識調査にみる犬山市の観光客の意識と行動」（村山、岡田ほか, 2023）、「観光アンケートにみる犬山観光の現在」（村山, 2025））の筆者である村山徹教授（経済学部）をはじめ、岡田和明特任教授（地域連携センター長）、中村真咲教授（犬山学研究センター長）に対してインタビューを行った。

(2) 堀部邸（2025年8月11日）

犬山市の歴史遺産の保護のために活動している NPO 法人ニワ里ねっこの拠点の一つである堀部邸にて、理事長である赤塚次郎氏に対してインタビューを行

った。

(3) Inside Japan Tours (2025年8月22日)

海外からの観光客向けにプランを提案している英国の旅行会社である Inside Japan Tours の小出彩子氏(日本支社長)とサステナビリティ部署の担当者にインタビューを行った。

(4) 犬山市観光協会(2025年12月10日)、犬山市役所観光課(2025年12月17日)

主に犬山市における観光振興策について調査するため、犬山市観光協会の後藤真司氏、犬山市役所観光課の桃原伸夫氏にインタビューを行った。

2-2. 調査結果

(1) 犬山市における観光振興

2007年以降、犬山市においてハード整備事業や、企業、個人と協働した事業がみられる。現在に至るまで、犬山市のエリア全体で観光業を盛り上げるための取り組みが行われてきた。加えて、愛知県における交通の要衝である名古屋市内の宿泊施設とも連携をとる、より広範な観光振興策についても検討されている。具体的には、犬山市に名古屋市内のホテルから視察に訪れるといった取り組みが行われている。

観光振興においては、地域住民の声を取り入れることも重要となる。そのために、犬山市と地域住民で意見交換の場を設ける取り組みも行われている。今後も、観光振興と、地域住民の居住空間の維持との折り合いをつけることが求められる。

(2) 犬山市における観光の現状

犬山市を訪れる外国人観光客の特徴として、セントレアを利用する人、日本の歴史に興味がある人、外国人観光客が過集中する観光地を避ける人が挙げられる。また、地域別にみると、アジア圏からの観光客は、城下町の食べ歩きや、着物体験など、日本文化に触れられる点を好む傾向にある。一方、ヨーロッパ圏からの観光客は、日本文化や歴史体験に加えて、木曾川周辺を歩いて犬山城下町を目指すなど、自然に触れて歩くということを好むことがうかがえる。

現時点で、ヨーロッパ圏からの観光客が比較的少ないことに関して、ヨーロッパ圏からの便が東京や大阪に着くことが多く、都市圏の中でも、愛知県以外から観光を始めるケースが多いことも挙げられる。

(3) 持続可能な観光に向けた課題

「犬山市における観光振興」で述べたように、地域住民の声を見逃さないことが、持続可能な観光に必要不可欠である。加えて、今後考えられることとして、働き手の減少や極端な観光地化における景観の阻害が挙げられる。前者において、犬山城におけるガイドや、木曾川で鵜飼いを継承する船頭など、伝統文化の維持に関わる働き手の減少が考えられる。対応策として、地域の若者をはじめ、犬山市を訪れる観光客にも、犬山市の伝統産業に触れて興味を持ってもらい、担い手となってもらうことが考えられる。

2-3. 結果 I のまとめ

インタビュー調査の結果より、おもに以下の三点が明らかになった。まず、犬山市への観光客が少なかった過去から、エリア全体の観光振興策が練られたことがわかった。次に、現時点では外国人観光客が目立って多く訪れているとはいがたく、オーバーツーリズムの現状があるとはいえないことも明らかである。加えて、観光振興に際して、現地住民の生活も考慮していることがわかった。以上のことから、犬山における今後の観光振興策として、先手のオーバーツーリズム対策を取るとともに、地域住民との折り合いをつけ、彼らの快適な生活を保障することが求められると考えられる。その際、交通手段や目的地として複数の選択肢を観光客に提示することが施策のひとつとして必要なのではないだろうか。

3. 研究結果 II 観光客への質問紙調査

3-1. 質問紙の調査方法

2025年12月7日(日)に犬山城下町にて、国内外からの観光客を対象に質問紙調査を行った。質問紙は日本語、英語、中国語(簡体字)の3言語で作成した(本論末の付録参照)。得られた回答数は無効回答を除き21件である。回答者の居住地の内訳は、日本在住者5件、韓国在住者2件、台湾在住者6件、中国(香港)在住者3件、スペイン在住者2件、チェコ在住者1件、ドイツ在住者1件、フィリピン在住者1件である。質問内容は、回答者の年齢、国籍、城下町までの交通手段、犬山城下町を訪れた目的、犬山観光のための情報収集源、感想などとなっている。質問紙調査終了後、回答を集計し主に7点の分析を行った。以下より、具体的な分析結果を示す。

3-2. 調査結果と分析

(1) 居住地別旅行形態

図1は、旅行同行者を居住地別にみたものである。回答者とその同行者の種別を分析した結果、国に関係なく「家族」や「パートナー」「友人」といった回答

がほとんどであり、団体旅行よりも個人旅行で犬山を訪れる人が多いことが分かった。また訪問理由として、目的地ではなく中継点として犬山を訪れたのは台湾から来訪した1名のみであった。

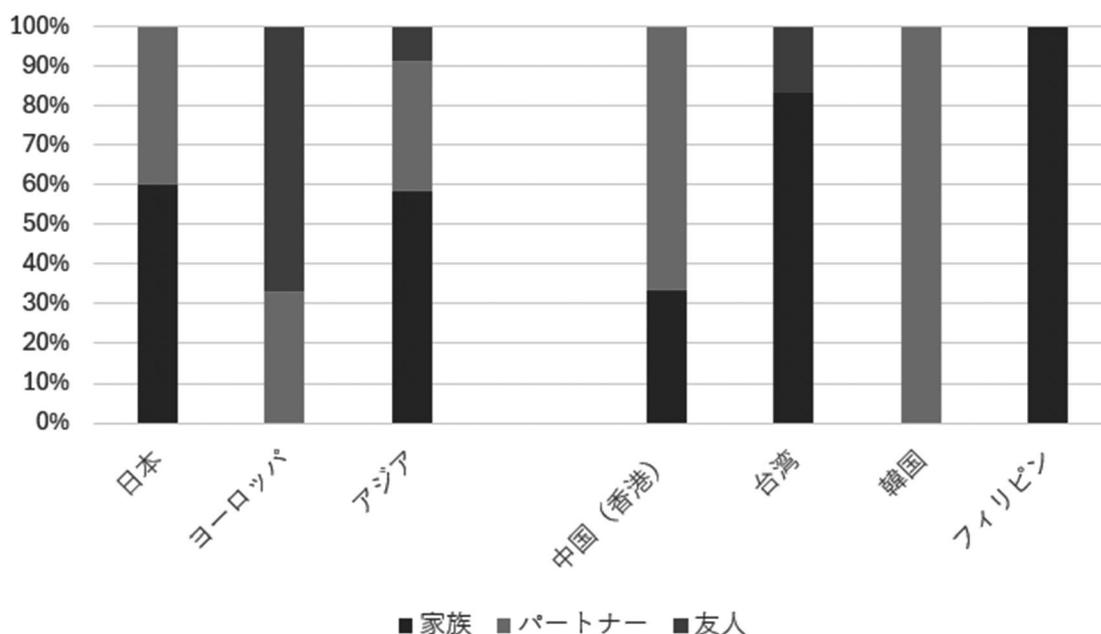


図1 居住地別にみた旅行同行者の構成（筆者作成）

(2) 居住地別訪問回数

図2は犬山への訪問回数を国別にみたものである。犬山への訪問回数を訪ねたところ、海外からの観光客では「2回目」と回答した台湾からの観光客2名以外は全員「初めて」と回答している。日本在住者は5人中1人が2回目、2人が3回目と回答している。

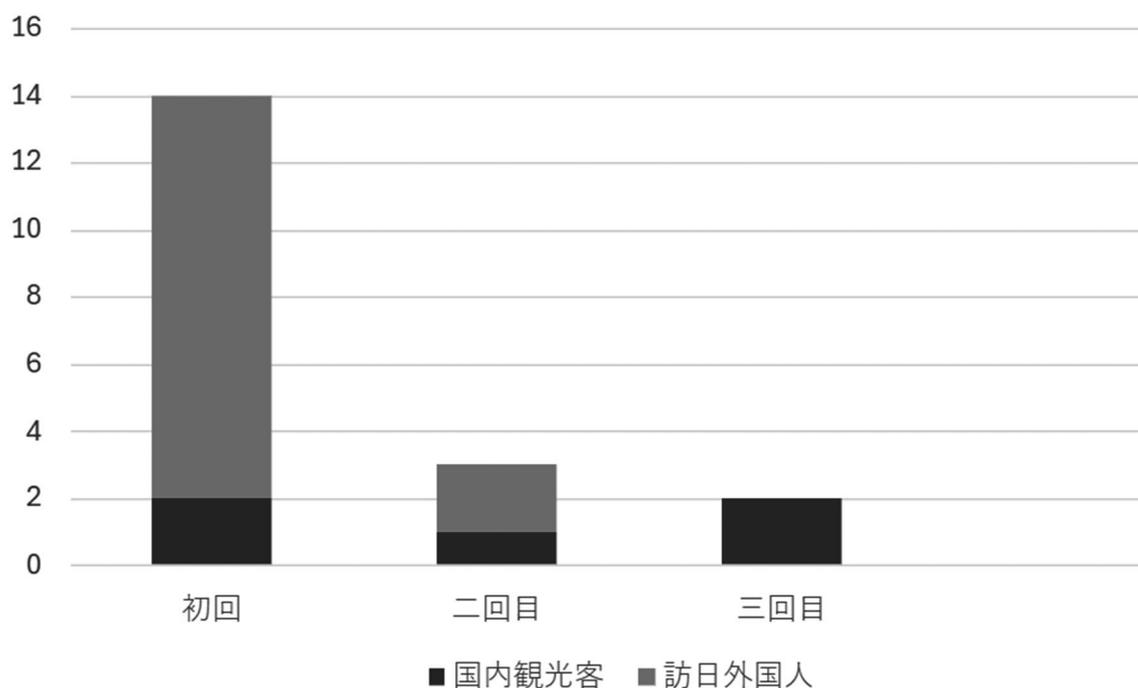


図2 居住地別にみた犬山への訪問回数（筆者作成）

（3）居住地別観光消費額

表1は、観光客が最もお金をかけたものを、国別にみたものである。何に最も多く出費したかを尋ねたところ、国内外問わず「飲食費」や「買い物代」との回答が多かった。

表1 居住地別にみた観光客が最もお金をかけたもの（筆者作成）

| | 国名 | 飲食費 | 入場料・ 利用料等 | 買い物代 (お土産等) | 交通費 | 宿泊費 |
|---------------|------|-----|--------------|----------------|-----|-----|
| ヨーロッパ | 日本 | 4人 | 0人 | 0人 | 0人 | 0人 |
| | チェコ | 0人 | 0人 | 1人 | 0人 | 0人 |
| | スペイン | 1人 | 0人 | 1人 | 0人 | 0人 |
| | ドイツ | 0人 | 0人 | 1人 | 0人 | 0人 |
| アジア (日本以外) | 台湾 | 1人 | 1人 | 2人 | 0人 | 1人 |
| | 香港 | 1人 | 0人 | 1人 | 0人 | 0人 |
| | 韓国 | 0人 | 0人 | 0人 | 1人 | 0人 |

（4）犬山市を知るための情報収集源

当質問では、「知人」「新聞・雑誌」「テレビ・ラジオ」「パンフレット」「ホームページ」「SNS（InstagramやX：旧Twitterなど）」「その他」という選択肢を

提示し、どの媒体から情報を得たかについて尋ねた。結果を居住地別に分け分析したところ、居住地ごとの目立った傾向はみられなかったが、いずれも知人から情報を得た人が多いことが明らかとなった。このことから、一度日本を訪れて好印象をもち、周囲に勧めてくれる人がいると考えられる。

(5) 居住地別の城下町での観光目的

図3は、城下町出の観光目的を、居住地別にみたものである。当質問は、「犬山城」「城下町の散策」「城下町での食事」「歴史遺産（犬山城以外）」「買い物」「他の目的地への中継点」「その他」という選択肢の中から最も近いものを選び回答してもらった。この結果を「日本」「ヨーロッパ」「アジア」に分けてグラフを作成したところ、アジアからの来訪者で特に犬山城を目当てに訪れたという回答が突出して多かった。中でも中国（香港）や台湾からの観光客が犬山城を主な目的としていることが判明した。

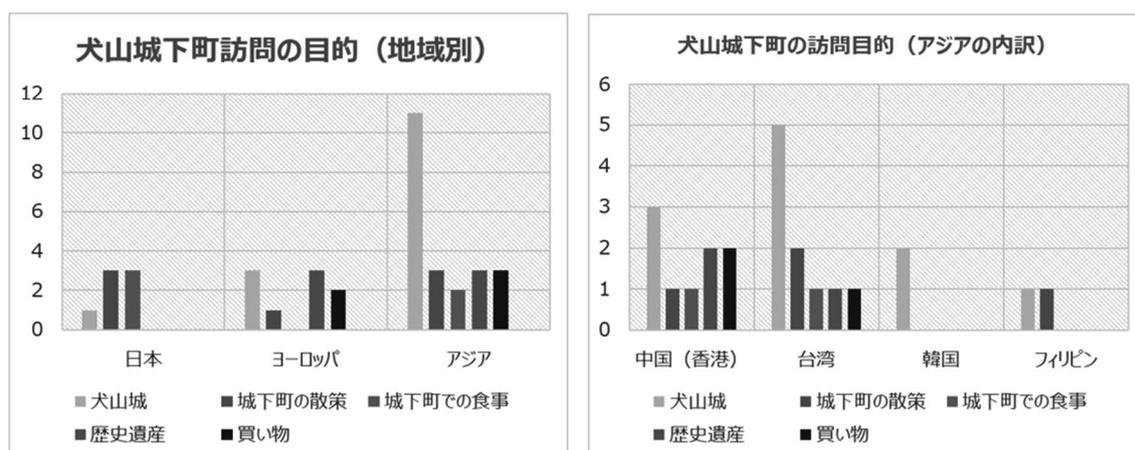


図3 居住地別にみた城下町での観光目的（筆者作成）

(6) 自由記述（期待・良かった点・改善を望む点）

表2は、期待していた点・良かった点・改善を望む点についての自由記述を居住地別にみたものである。良かった点として「人々が親しみやすい」（台湾在住者）、「人々の親切さ、好意的なおもてなし」（スペイン在住者）、「親切な人々」（チェコ在住者）など人のあたたかさを挙げている意見が目立った。これは、城や歴史的町並みといった物的資源だけでなく、「日本人との関わり」という非物質的資源も観光要素として重要な役割を果たすことを示唆している。

表2 居住地別にみた自由記述（期待・良かった点・改善を望む点）（筆者作成）

| 国名 | 期待していた点 | 良かった点 | 改善を望む点 |
|--------|--------------------------|-----------------------------------|-----------------------|
| 日本 | 食事 | 景色 | |
| 中国（香港） | 天気 | 犬山城 | 並び時間 |
| 韓国 | 文化、景色 | | |
| 台湾 | 落ち着いた雰囲気、 食べ歩き、城の中に入る | 食べ物が美味しくて人々 が親しみやすい | 城の待ち時間、より多くの 英語の情報 |
| スペイン | 城や伝統 | 落ち着いた雰囲気、 人々の親切さ、 好意的なおもてなし | |
| チェコ | 日本の文化を見る | 親切な人々 | |
| ドイツ | 寺 | 古い街 | |

（7）居住地別にみた犬山への再訪意向

図4は、犬山への再訪意向について尋ねた結果をまとめたものである。「大変そう思う」と回答した7名は、親切な人々（チェコ在住者）、美しく落ち着いた雰囲気（スペイン在住者）、きれいな景色（台湾在住者）、清潔さ、快適さ（台湾在住者）、建築（香港在住者）などに満足している様子が見えたと回答した。7名は、「どちらでもない」と回答したのは台湾在住者1名、韓国在住者1名だった。彼らは「城の待ち時間」や「より多くの英語の情報」を改善点として挙げている。

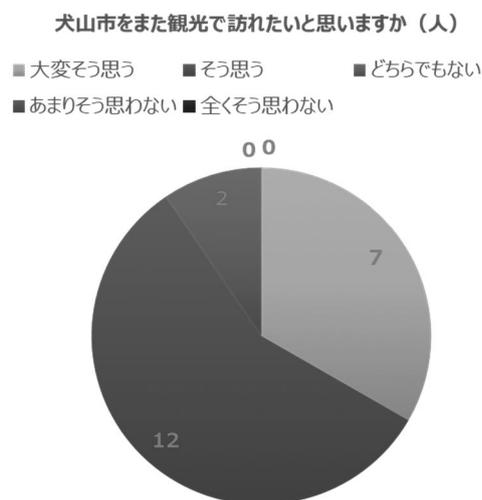


図4 犬山への再訪意向（筆者作成）

3-3. 結果 II のまとめ

ヨーロッパからの観光客はパートナーや友人と来ている人が多くファミリー

層は少ない。一方で、台湾や中国（香港）からの観光客は家族連れが多いことが明らかとなり、地域による差が見られた。また、犬山観光の情報収集源として突出して使われているものは今回の調査からは判明しなかった。当初は SNS が近年の情報収集源として有力なのではないかと予測していたが、いずれの国の人も知人から情報を得て犬山を選ぶ人が一定数存在することが明らかとなった。特に台湾や中国（香港）からの観光客は知人から聞いたうえで YouTube から情報を得るといったパターンが多かった。自由記述の内容からは、多くの人が歴史的な街並みや地元の人々の親しさを魅力として挙げていた一方で、待ち時間や人の多さを改善点として挙げていた人もいた。公的機関や民間の旅行会社などによる犬山観光の促進が図られていることから、今後さらに犬山への来訪者数が増加すると仮定すると、先駆けて混雑緩和策を検討する必要があると言える。

4. 考察

4-1. 現状

(1) 観光客が求めているもの

エリア全体での観光振興策が練られているが、現時点では、観光客の多くは犬山城と城下町の食べ歩きを目的に訪れている。また、企業と公的期間との連携策として、犬山市が名古屋市内の旅行会社やホテルの視察団の受入れを行っていた。加えて、地域住民との話し合いの場の設置について、その効果は予測段階にある。

(2) 犬山市を目的地として選ぶ根拠

観光客の動向は、研究成果Ⅰ・Ⅱで述べた通りで、彼らの求めているものとして、日本ならではの歴史や文化、食に触れることが挙げられる。犬山市を観光の目的地に選ぶ根拠としては、落ち着いた雰囲気を楽しむため、また城や城下町など伝統的な風景を見るためであることが分かった。

4-2. 観光活発化の利益と課題

利益として、外国人観光客に犬山市へさらに興味を持ってもらうことにより、宿泊者の増加とそれによる経済効果、伝統産業の次世代の担い手の確保につながると考える。

一方、今後の課題として、観光がさらに活発化し、観光客が特定の目的地に集中する可能性があることや、それに対する地域住民の声を見過ごしかねないことが挙げられる。

4-3. 持続可能な観光の展望

持続可能な観光の展望として、豊富な歴史遺産や、木曾川などの自然についても、訪問先として観光客に情報提供することや地域住民の意見も取り入れた観光振興策を取ることを挙げた。

4-4. 今後の研究課題

他の観光地との比較調査や、先程述べた地域住民の意見を取り入れた観光振興に関する具体策の検討などとしている。

謝辞

インタビュー調査及び質問紙調査にご協力いただいた以下の皆様に心より感謝申し上げます。

愛知県立大学 教育支援センター長 菊池好行先生
名古屋経済大学 地域連携センター長 岡田和明先生
経済学部 村山徹先生
犬山学研究センター 中村真咲先生
NPO 法人ニワ里ねっと 理事長 赤塚次郎様
インサイドジャパン・ツアーズ 日本支社長 小出彩子様
サステナビリティ部署 担当者様
犬山市観光協会 後藤真司様
犬山市役所観光課 課長補佐 桃原伸夫様
質問紙調査に答えていただいた観光客の皆様

参考文献

犬山市「犬山市観光戦略 令和4年度～令和13年度（2022～2031）」（2022年3月）

小池信和「第13回昇龍道プロジェクト推進協議会 犬山市の観光施策について『犬山市観光戦略策定と今後』」愛知県犬山市観光課
<https://www.tb.mlit.go.jp/chubu/kikaku/syoryudo/meeting-rd13.html>
（最終閲覧日：2025年11月11日）

「外国人観光客の増加率が全国1位・・・愛知県犬山市に『オーバーツーリズム』の兆し 解決のカギは“分散と宿泊”」東海テレビ，2024年7月21日
https://www.tokai-tv.com/tokainews/feature/article_20240721_35336
（最終閲覧日：2026年1月19日）

崔錦珍（2020）「オーバーツーリズムの発生と持続可能な観光発展の課題」『九州大学国際・経済論集』5巻，pp. 193-206

- 奈良美和子, 前川圭一 (2019) 「京都のオーバーツーリズムの現状と観光地の
デ・マーケティング」 京都大学経営管理大学院
- 西川亮 (2021) 「オーバーツーリズム観光地における新型コロナウイルス流行
語の住民の観光に対する意識に関する研究—観光との接点を有する住民を
対象として—」 『観光研究』 32 卷 (2 号), pp. 53-66
- 村山徹、岡田和明、佐藤正之、加藤秋人 (2023) 「意識調査にみる犬山市の観
光客の意識と行動」 『経営経済学論集』 30 卷 (2 号) , pp. 1-11
- 村山徹 (2025) 「観光アンケートにみる犬山観光の現在」 『経済経営学論集』 32
卷 (2 号) , pp. 29-38

付録：調査で使った質問紙（調査では日本語、英語、中国語の三言語版を使用。本論文では紙幅の都合上、日本語版のみ掲載する）

観光に関する調査へのご協力をお願い

代表 愛知県立大学 外国語学部 国際関係学科 3年 山門悠楽
担当教員 亀井伸孝

この度は、調査にご協力いただき誠にありがとうございます。
私たちは、愛知県立大学にて採択された学生自主企画研究として、「持続可能な観光の展望—犬山市におけるフィールドワークを通して—」というテーマで研究を行っています。本アンケートでお答え頂いた個人情報につきましては、研究以外の目的で使用いたしません。研究終了後は、適切な方法で処分させていただきます。

以下では、最も当てはまるものに○をつけてください。

1. 性別

男性 女性 回答しない

2. 年齢

20歳未満 20歳代 30歳代 40歳代 50歳代 60歳代 70歳以上

3. 現在どちらにお住まいですか。

愛知県内 岐阜県内 その他都道府県[]
海外[国名:]

4. 今回の犬山観光は誰と一緒に来られましたか。

一人で 夫婦・カップル 家族(子供連れ) 友人・グループ 同僚
団体(マイクロバス・団体バスでの来訪者) その他[]

5. 犬山城下町までの交通手段は何ですか。

自家用車・レンタカー 鉄道 路線バス 団体バス 自転車・バイク
徒歩 その他[]

→問5で、「鉄道」と答えた方のみ

6. どの駅で下車しましたか。

犬山駅 犬山遊園駅 犬山口駅 その他[]

7. 今回の旅行では宿泊しますか。

日帰り[おおよその犬山滞在時間 時間] 宿泊[泊数 泊]

→問7で、「宿泊」と答えた方のみ

8. どこで宿泊しますか。

犬山市内 名古屋市内 それ以外の愛知県内 岐阜県内
その他[]

9. 犬山城または城下町を訪れるのは何回目ですか。

初めて 2回目 3回目 4回目以上

10. 今回、犬山城下町を訪れた目的を教えてください。

- ア. 犬山城下町に興味があり、観光するため →問 11 へお進みください。
 イ. 中継点として通る場所だったため →問 11 へお進みください。
 ウ. 犬山市内の特定の目的地があったため →問 13 へお進みください。
 エ. その他[] →問 16 へお進みください。

→問 10 で、アまたはイと答えた方のみ

11. 犬山市の観光について知るために、一番はじめに何から情報を得ましたか。
 下記より一つお選びください。

- | | | | |
|------------|-------------------------------------|------------|-----------|
| a. 知人から聞いた | b. 新聞・雑誌 | c. テレビ・ラジオ | d. パンフレット |
| e. ホームページ | f. SNS[Instagram, X : 旧 Twitter など] | | g. その他[] |

→問 10 で、アまたはイと答えた方のみ

12. 犬山市を訪れる際に最も主要な情報源としたものを、問 11 の語群より一つ選び、
 アルファベットをお書きください。

「g. その他」の場合は、情報源の名前をお書きください。

- [] →問 16 へお進みください。

→問 10 で、ウと答えた方のみ

13. 犬山市内の目的地を、重要な順に 3 つ挙げて、名前をお書きください。

- 一か所目 []
 二か所目 []
 三か所目 []

→問 10 で、ウと答えた方のみ

14. 3 つの目的地それぞれについて、一番はじめに何から情報を得ましたか。

下記より一つ選び、アルファベットでお答えください。

「g. その他」の場合は、情報源の名前をお書きください。

- | | | | |
|------------|-------------------------------------|------------|-----------|
| a. 知人から聞いた | b. 新聞・雑誌 | c. テレビ・ラジオ | d. パンフレット |
| e. ホームページ | f. SNS[Instagram, X : 旧 Twitter など] | | g. その他 |

- 一か所目 []
 二か所目 []
 三か所目 []

→問 10 で、ウと答えた方のみ

15. 3 つの目的地それぞれについて知るために、最も主要な情報源としたものを、問 14
 の

語群から一つ選び、アルファベットをお書きください。

「g. その他」の場合は、情報源の名前をお書きください。

- 一か所目 []
 二か所目 []
 三か所目 []

ここからは、全ての方にお聞きします。

16. 今回、犬山城下町には、何をお目当てに訪れましたか。(複数回答可)

- 犬山城の見学 犬山城以外の歴史遺産の見学 城下町での食事 城下町の散策
 お土産などの買い物 ほかの場所が目的地だった
 その他[]

17. 今回の観光旅行でのお一人当たりのおおよその出費額をご回答ください。
(犬山市外での出費は含まない)

約 円

18. 今回の観光旅行で最もお金がかかったことは何ですか。お一つお選びください。
飲食費 入場料・利用料等 買い物(おみやげ代) 交通費(駐車料金含む)
宿泊費(連泊の総額) ツアー・パック料金 その他[]

19. 犬山市にまた観光で訪れたいと思いますか。
大変そう思う そう思う どちらでもない あまり思わない 全く思わない

以下は自由記述です。

20. 今回の犬山観光で期待していたことがあればお書きください。

21. ここまでの犬山観光で良かった点があればお書きください。

22. ここまでの犬山観光で改善を望む点があればお書きください。

ここまでアンケートにご協力いただき、誠にありがとうございました。
ご不明な点がございましたら、下記までご連絡ください。

愛知県長久手市茨ヶ廻間 1522 番 3
学務課 TEL : 0561-76-8824
国際関係学科亀井研究室気付
学生自主企画研究グループ代表 山門悠楽

参 考 資 料

資料 1 : 学生自主企画研究募集揭示

資料 2 : 採択グループ一覧 (第二次審査結果)

資料 3 : 中間報告会プログラム

資料 4 : 最終研究発表会プログラム

2025 年度 学生自主企画研究・活動 募集要領

大学は授業だけが学びの場ではありません。今、大学生に求められているのは、自分から問題を発見し、探究し、解決策を考える力、自分から他者に働きかける力です。そんな力をつけて県大から社会に巣立って行ってほしいとの願いを込めて、今年もみなさんの自主企画研究・活動を支援します。

自分たちの関心に応じてテーマを設定し、グループで、調査型研究（活動）や提案型研究（活動）を企画して応募してください。審査の上、1グループ上限25万円まで研究・活動資金を助成します。

下記の要領に従って、ふるって応募してください。

1. 応募資格

愛知県立大学生、同大学院生で構成された研究または活動グループ

- ① グループ内の学生の所属学部・学年は問いません。
- ② グループは代表者を含む正規構成員（3名～10名）と協力者（0名～人数上限なし）で構成してください。
- ③ 本学専任教員の推薦が必要です。推薦教員はグループのアドバイザーを兼ねます。

2. テーマ

○ 地域連携テーマ

愛知県内又は愛知県近傍の地域の歴史や風土に関する研究・調査や地域活性化や交通機関の利用促進など、地域の課題解決に繋がる研究・調査等テーマ

○ 多文化共生テーマ

在住外国人の医療、福祉、教育、雇用、言語、文化の諸問題など愛知県内又は愛知県近傍の地域のグローバル化に伴う地域社会の多言語・多文化化の進展に伴う課題などの研究・調査等テーマ

○ その他、自由テーマ

上記テーマによらず、自分たちの関心に応じた自由な研究・調査・活動テーマ

授業の課題や個人の卒論・卒研・修論・博論と同じ研究、過去に採択された研究・活動テーマと同一のテーマは応募できません。

3. 助成金額

上限25万円（計画内容等により調整あり）

4. 採択件数

6件程度

5. 応募方法

「2025年度学生自主企画研究・活動計画書」（UNIPA掲載）に必要事項を記入して、長久手キャンパス学務課にメールもしくは紙媒体で提出してください。

○ 応募締切日：2025年5月14日（水）17:00

○ 提出方法：

- ① メール提出：gakumu@bur.aichi-pu.ac.jp
- ② 紙媒体提出：長久手キャンパス 学務課窓口

6. 採択方法

① 第一次審査（書類審査）

「2025年度学生自主企画研究・活動計画書」の書類審査を行います。
審査結果は、2025年5月13日（火）までに発表予定です。

② 第二次審査（公開プレゼン）

第一次審査通過グループを対象に、2025年5月21日（水）13:00～14:30 S101教室にて2次審査（公開プレゼン）を行います。
審査結果（採択グループ）は、2025年5月26日（月）までに発表予定です。

7. 公開ヒアリング審査基準

① 発表する際、以下の項目を必ず入れてください。

- ・要旨
- ・動機やきっかけ
- ・スケジュール
- ・研究活動方法および場所
- ・経費の内訳
- ・研究・活動の結果予測

② 評価項目

問題意識、地域への貢献度、研究計画性、実行性、プレゼンテーションから総合評価します。

③ 学部1年生のみで構成されたグループは加点があります。

8. 研究・活動期間

2025年6月2日（月）から2026年1月20日（火）まで

9. 研究・活動成果公開スケジュール（予定）

- | | |
|---|-----------------------------------|
| ① 中間報告会 | 2025年10月22日（水）13:00～14:30（S101教室） |
| 研究・活動成果の中間報告を行います。 | |
| ② 最終報告会 | 2026年1月21日（水）13:00～14:30（S101教室） |
| 研究・活動成果の最終報告を行います。 | |
| 審査の上、金賞（1グループ）、銀賞（1グループ）には賞状、副賞（図書カード）を授与します。 | |
| ③ 実施報告書（会計報告書）提出締切日 | 2026年1月30日（金） |
| ④ 研究・活動成果レポート提出締切日 | 2026年1月30日（金） |

10. その他

- ① 採択されたグループは、教育支援センターが開催するスキルアップ講座（6月中旬予定）に必ず出席してください。日程は別途連絡します。
- ② 実施した研究・活動内容の中間報告を2回（8月・12月）提出してください。

| |
|--|
| 問い合わせ先 長久手キャンパス 学務課（担当：川島・杉浦） TEL：0561-76-8821 Mail：gakumu@bur.aichi-pu.ac.jp |
|--|

2025年度学生自主企画研究・活動 第2次審査 採択結果

| 番号 | グループ | | | 推薦教員 | | |
|----|------------------|------------------|---------------------------------|------|------------------|---------|
| 1 | 小関 明里 オゼキアカリ | 日本文学部 歴史文化学科 | 持ち歩きたい観光マップを考えるー篠島から魅力発見！ー | 地域連携 | 日本文学部 歴史文化学科 | 服部 亜由未 |
| 2 | 長尾 愛梨 ナガオアイリ | 日本文学部 歴史文化学科 | 普門寺の前近代文献資料による東海地域社会史の将来展望的構築 | 地域連携 | 日本文学部 歴史文化学科 | 上川 通夫 |
| 3 | 加藤 舞乙 カウマオ | 教育福祉学部 教育発達学科 | 「困難若年女性」にとっての安全な居場所の要件 | 自由 | 教育福祉学部 社会福祉学科 | 宇都宮 みのり |
| 4 | 中山 怜士 ナカヤマレイジ | 情報科学部 情報科学科 | 大学生の抱える睡眠課題の改善に向けたガイドラインの作成 | 自由 | 看護学部 看護学科 | 横山 加奈 |
| 5 | 山門 悠楽 ヤマカト ユラ | 外国語学部 国際関係学科 | 持続可能な観光の展望ー犬山市におけるフィールドワークを通してー | 地域連携 | 外国語学部 国際関係学科 | 亀井 伸孝 |

2025年度学生自主企画研究・活動 中間報告会プログラム

日時：2025年10月22日（水）13:00～14:30

場所：長久手キャンパス S101教室

プログラム：

1. 開会あいさつ 菊池 教育支援センター長

2. ヒアリング

| | 時間 | 代表者名 | 学部学科 | 研究テーマ | 区分 | 推薦教員 | |
|---|-------------|-------------------|------------------|---------------------------------|------|------------------|---------|
| 1 | 13:05～13:20 | 小関 明里 オセキ アカリ | 日本文化学部 歴史文化学科 | 持ち歩きたい観光マップを考えるー篠島から魅力発見！ー | 地域連携 | 日本文化学部 歴史文化学科 | 服部 亜由未 |
| 2 | 13:20～13:35 | 長尾 愛梨 ナガオ アイリ | 日本文化学部 歴史文化学科 | 普門寺の前近代文献資料による東海地域社会史の将来展望的構築 | 地域連携 | 日本文化学部 歴史文化学科 | 上川 通夫 |
| 3 | 13:35～13:50 | 加藤 舞乙 カウ マオ | 教育福祉学部 社会福祉学科 | 「困難若年女性」にとっての安全な居場所の要件 | 自由 | 教育福祉学部 社会福祉学科 | 宇都宮 みのり |
| 4 | 13:50～14:05 | 中山 怜士 ナカヤマ レイジ | 情報科学部 情報科学科 | 大学生の抱える睡眠課題の改善に向けたガイドラインの作成 | 自由 | 看護学部 看護学科 | 横山 加奈 |
| 5 | 14:05～14:20 | 山門 悠楽 ヤマカト ユラ | 外国語学部 国際関係学科 | 持続可能な観光の展望ー犬山市におけるフィールドワークを通してー | 地域連携 | 外国語学部 国際関係学科 | 亀井 伸孝 |

3. 講評 古川理事長、川畑学長

4. 閉会あいさつ 菊池 教育支援センター長

2025年度学生自主企画研究・活動 最終報告会プログラム

日時：2026年1月21日（水）13:00～15:00

場所：長久手キャンパス E棟2階 GroCuS

Zoom：<https://zoom.us/j/91958044118?pwd=cJmjmXPwqbhINsWigXD6a4JKE9XAga.1>
 (ウェビナーID：919 5804 4118 パスコード：885995)

※ 地域連携センターを通じて、録画動画を愛知県教育委員会に提供(希望があれば県内高校内で配信予定)

※ 学術研究情報センター主催のアカデミックデイday2(オンデマンド研究会)にて録画動画を配信

プログラム：

(司会) 教育支援副センター長 柴田先生

1. 開会あいさつ 教育支援センター長 菊池先生

2. 活動発表・講評・表彰

| 時間 | 代表者名 | 学部学科 | 研究テーマ | 分野 | 推薦教員 |
|---------------|-----------------------------|------------------|---------------------------------|------|-----------------------------|
| 1 13:05～13:20 | 小関 明里 オセキアカリ | 日本文化学部 歴史文化学科 | 持ち歩きたい観光マップを考える 一篠島から魅力発見！ | 地域連携 | 日本文化学部 歴史文化学科 服部 亜由未 |
| 2 13:20～13:35 | 長尾 愛梨 ナガオアイリ | 日本文化学部 歴史文化学科 | 普門寺の前近代文献資料による東海地域社会史の将来展望的構築 | 地域連携 | 日本文化学部 歴史文化学科 上川 通夫 |
| 3 13:35～13:50 | 加藤 舞乙 カウマオ | 教育福祉学部 社会福祉学科 | 「困難若年女性」にとつての安全な居場所の要件 | 自由 | 教育福祉学部 社会福祉学科 宇都宮 みのり |
| 4 13:50～14:05 | 中山 伶士 ナカヤマレイジ | 情報科学部 情報科学科 | 大学生の抱える睡眠課題の改善に向けたガイドラインの作成 | 自由 | 看護学部 看護学科 横山 加奈 |
| 5 14:05～14:20 | 山門 悠楽 ヤマカドユウ | 外国語学部 国際関係学科 | 持続可能な観光の展望 一犬山市におけるフィールドワークを通して | 地域連携 | 外国語学部 国際関係学科 亀井 伸孝 |
| 6 14:20～14:30 | 講 評 (古川理事長) ※審査集計 | | | | |
| 7 14:30～14:40 | 講 評 (川畑学長) ※審査集計 | | | | |
| 8 14:40～14:55 | 表 彰 式 (受賞グループ発表) ※ 終了後に集合写真 | | | | |

3. 閉会あいさつ 教育支援センター長 菊池先生

【審査結果】

| 賞 | 代表者名 | 学部学科 | 研究テーマ |
|----|-------|------------------|-----------------------------------|
| 金賞 | 小関 明里 | 日本文化学部 歴史文化学科 | 持ち歩きたい観光マップを考える 一篠島から魅力発見！ |
| 銀賞 | 長尾 愛梨 | 日本文化学部 歴史文化学科 | 普門寺の前近代文献資料による東海地域社会史の 将来展望的構築 |